

ヒ ジ サ イ
土 祭 2021

土祭 2021 総括報告書

土祭事務局

2022.2

目次

1. 土祭 2021 概要	1
1-1 実施目的	
1-2 実施概要	
1-3 事業規模[会場・企画・人員]	
1-4 全体における部門別[予算・決算見込]	
1-5 土祭実行委員会事業費[予算・決算見込]	
1-6 今回の特色	
2. 実績の報告	8
2-1 来場者数	
2-2 来場者の満足度	
2-3 経済波及効果	
2-4 公式コレクションファイル販売と配布実績	
3. 各企画における報告	13
4. 広報・メディア制作における報告	41
4-1 実施概要	
4-2 広報活動やメディア制作での成果	
5. 準備・運営・サービスにおける報告	47
5-1 会場選定	
5-2 会期中の運営	
6. 土祭開催におけるコロナウイルス感染拡大予防対策	49
6-1 基本的な感染予防対策基準	
6-2 土祭開催におけるコロナウイルスガイドライン	
7. 土祭 2021 の総括	51
7-1 感染予防対策	
7-2 文化経済活動	
7-3 企画運営参加者の満足度	
8. 今後の展開について	53
8-1 土祭を通じた地域づくり、地域資産の保持・継承（内部的効果）	
8-2 地域資源を活かした滞在型観光地域づくり（外部的効果）	

1. 土祭 2021 概要

1-1 実施目的

土祭 2021 の開催は、長引く新型コロナウイルスの感染拡大による日常生活や地域経済の疲弊という状況のなかで「感染拡大防止」と「文化経済活動」の両立を図り、ウィズコロナ、そしてアフターコロナの時代における新しい益子の魅力づくりにチャレンジしていく試みでもあった。そのため開催にあたっては、新型コロナウイルス感染予防のためのガイドラインに定められた感染対策を前提として、具体的には「会期の長期化による来場者の分散」や「屋外会場の活用」など感染拡大予防に十分に配慮した上で実施することとした。

土祭の「志」/「理念」のもとに、土祭 2021 キャッチコピーを「アラワレル、未知の日常。」とした。非日常の長引くコロナ禍の時代だからこそ、「日常」を大切に、「日常」を捉え直し、「日常」の中の表現の営みを大切に分かち合い、益子の歴史・風土の上に、益子に住む人も訪れる人も、まだ出会えていない「未知の日常」がさまざまに表現され可視化され立ち現れる。そんな土祭を創りあげていくことが、新しい益子の魅力づくりに繋がっていくものと考えている。

文化経済活動に繋げていくための体制づくりとして、土祭を 11 部門に編成し、それぞれのプロジェクトリーダーが自主性をもって企画立案し、実践していく体制をとった。これにより、各得意分野における視点から魅力を最大限に引き出し表現する。そして、来場者との共感を第一に考えて、魅せる・体験する企画を提供する。来場者の満足度を調査し検証していくことで、持続可能な組織（人材）が育成されていくことを大いに期待している。

◇土祭の志

- 1) 地域を創る
- 2) 文化を興す
- 3) 風土を育む

◇土祭の基本理念

- 1) 益子らしさを探求し、益子らしさを大切にする
「土」を益子らしさの根源とし、「土に対する感謝の念」を大切にする。
- 2) それぞれの地域やコミュニティを結び直す
ひとつひとつの魅力ある地域を、文化と経済活動と自然環境の協奏によって創る。
- 3) 関わりしろをつくる
「協働」の精神のもと、「関わりしろ」を意識的に作り、楽しく仲間づくりを行う。
- 4) 遺産づくりを念頭におく
土祭での「遺産づくり」を念頭に、回を重ねるごとに有形無形の魅力を地域に増やす。
- 5) 自然との共生をめざす
自然とともに生きることを改めて学び、考え、できることにチャレンジしていく。
- 6) 寛容さを大切にする
個性や多様性を尊ぶ。人も自然も、さまざまな個性が共存する益子の良さを活かす。
- 7) 地域的な経済循環を念頭におく
新たな生業や小商いの創出につながる仕組みづくりにチャレンジする。

1-2 実施概要

名 称	土祭 2021 HIJISAI2021
コンセプトコピー	アラワレル、未知ノ日常。
会 期	2021 年 5 月 22 日 [土] —11 月 14 日 [日]
メ イ ン 期 間	2021 年 10 月 15 日 [金] —11 月 14 日 [日] (金・土・日・祝のみ開催) ※11 月 4 日 [木] を含む
時 間	10:00—17:00
入 場 料	アート作品展示は、公式コレクションファイル (500 円) の掲示が必要。町内 在住及び中学生以下は無料パスポート (スタンプラリー台紙) を配布。 ワークショップ・セミナーは、一部有料。
内 容	地域づくりプロジェクト、屋外での作品展示、セミナー、ワークショップなど の体験企画ほか
公式ウェブサイト	http://hijisai.jp
S N S 等	公 式 Facebook https://www.facebook.com/mashikohijisai 公 式 Instagram https://www.instagram.com/hijisai/ 公 式 Youtube https://www.youtube.com/playlist?list=PL-BEWVHT7VXb8R-AbTSAhYocv6nFNhFFu
運 営	主 催 土祭実行委員会 共 催 益子町 実 行 委 員 長 益子町長 大塚朋之
企 画 制 作	田野地区委員会 リーダー 高野康弘 益子地区委員会 リーダー 木村光臣 七井地区委員会 リーダー 清水益栄 住民プロジェクト・ツーリズム 一般社団法人ましこラボ 陶 芸 ・ 手 仕 事 益子焼関係団体振興協議会 ア ー ト 藤原彩人 食 育 ・ 食 文 化 株式会社ましこカンパニー (道の駅ましこ) 日 本 遺 産 セ ミ ナ ー 益子町生涯学習課 ラ ン ド ス ケ ー プ 小堀芳秀 空 間 ・ 会 場 づ く り 高山英樹 広 報 LLP 風景社 (大塚康宏・須田将仁・簗田理香) 関 連 企 画 各企画の主催団体
土 祭 事 務 局	局 長 福田浩一 (観光商工課長) 次 長 那花夕子 (観光商工課土祭担当係長) 局 員 吉川真司、吉河歩香、早瀬友貴、勇利佳
メインビジュアル写真	馬場真海
公式フォトグラファー	佐藤元紀・柴美幸・ 柳場大 (アート)・栗谷昌克 (陶芸・手仕事)・仁平彩香 (クロージング)

1-3 事業規模[会場・企画・人員]

会場規模	総会場数 52 <敬称略、順不同>	
	田野地区	<3 会場> 八幡神社（長堤） 道の駅ましこ 前沢町有林
	山本地区	<3 会場> 八幡神社（山本） 光明寺 松本コミュニティセンター
	益子地区	<30 会場> 益子向原の杉林 元平野スタンド 陶芸メッセ・益子 太平神社 ヒジ ノワ cafe & space 藍染わらたに 土祭 KENMOKU 広場 日下田藍染工 房 西明寺 益子町中央公民館 つかもと迎賓館 円道寺池 久保邸長 屋門 フォレスト益子 益子焼しのはら Cafe Novel 東側建物 d Agora 大宿窯 ましこラボ 益子駅 濱田庄司記念益子参考館 そば明水 民芸店ましこ 内町屋台パーク 益子本通り商店街 とんかつちとせ 杣（そま） 町民センター総合体育館 益子館 土祭広場
	埴地区	<2 会場> 星宮神社 益子西小東側の田んぼ
	大羽地区	<6 会場> 綱神社 KINTA アトリエ 四百窯 地蔵院 cafe マシコビト 板橋林道
	七井地区	<3 会場> 御霊神社 博陶房 円通寺
	小宅地区	<5 会場> 小宅古墳群 藤原陶房 亀岡八幡宮 森林ノ牧場益子 旧小宅小学校
企画数	総企画数 61	
	【A】地域づくり	7 企画
	【B】住民プロジェクト	19 企画
	【C】アート	4 企画
	【D】空間会場づくり	1 企画
	【E】住民参加の広報プロジェクト	3 企画
	【F】日本遺産かさましこセミナー	2 企画
	【G】食育・食文化	4 企画
	【H】ランドスケープ	3 企画
	【I】ツーリズム	1 企画
	【J】陶芸・手仕事	5 企画
	【K】関連企画	6 企画
	【L】その他	6 企画

出演者数	総出演者数 33 団体 212 名（延べ） 【A】 地域づくり 【B】 住民プロジェクト 【C】 アート 【D】 空間会場づくり 【E】 住民参加の広報プロジェクト 【F】 日本遺産かさましこセミナー 【G】 食育・食文化 【H】 ランドスケープ 【I】 ツーリズム 【J】 陶芸・手仕事 【K】 関連企画 【L】 その他	11 名（聞き取り調査協力者） 16 団体 39 名（実施者、出店者など） 4 団体 24 名（アーティスト） 1 団体 6 名（講師など） 18 名（クリエイター、レポーター） 3 名（セミナー登壇者） 37 名（生産者、協力者） 8 団体 46 名（講師、学生、協力者） 2 団体 2 名（協力者） 5 名（講師） 2 団体 15 名（講師など） 6 名（公演者など）
運営 スタッフ数	総スタッフ数 219 名（延べ） 【A】 地域づくり 【B】 住民プロジェクト 【C】 アート 【D】 空間会場づくり 【E】 住民参加の広報プロジェクト 【F】 日本遺産かさましこセミナー 【G】 食育・食文化 【H】 ランドスケープ 【I】 ツーリズム 【J】 陶芸・手仕事 【K】 関連企画 【L】 その他	55 名（地区委員、協力者） 5 名（ましこラボ） 28 名（展示スタッフ、ヒジサボなど） 10 名（ディレクター、協力者） 4 名（風景社、土祭 2021 ストリートアート事務局など） 36 名（ボランティア、生涯学習課職員） 10 名（ましこカンパニースタッフ） 4 名（建設課職員） 5 名（ましこラボ） 36 名（益子焼振興協議会、陶芸・手仕事チーム） 11 名（主催者スタッフ、職員など） 15 名（ヒジサボ、職員）

1-4 全体における部門別事業費[予算・決算]

土祭実行委員会事業	支出額 17,668,647 円	(国 9,061,354 円 / 町 8,607,293 円)
経済対策事業	支出額 14,906,155 円	(国 14,906,155 円 / 町 0 円)
合計	支出額 32,574,802 円	(国 23,967,509 円 / 町 8,607,293 円)

(土祭実行委員会事業)

	予算・決算			財源内訳		主な内容
	予算額	補正額	支出額	国補助	町負担	
総務	8,300,000	▲ 361,274	7,938,726	684,451	7,254,275	レポーター養成プロジェクト、土祭 2021 オープニング、土祭 2021 クロージング、土祭ストア、土祭アーカイブ、土祭スタンプラリー、ヒジサイ図書室
アート	6,500,000	▲ 299,629	6,200,371	4,847,353	1,353,018	感性の土壌「丘で踊る」、感性の土壌「森を歩く」、感性の土壌「七つの神社を巡る」、感性の土壌「大地で遊ぶ」
地域づくり	1,800,000	▲ 181,244	1,618,756	1,618,756	0	たのひじ展、菜の花プロジェクト、里山プロジェクト、食プロジェクト、竹細工プロジェクト、昔の街並みと子どもの遊び〜駄菓子屋開店〜、益子駅おもてなし企画、おうちで見よう益子花火
空間・会場	1,900,000	▲ 483,206	1,416,794	1,416,794	0	「土祭」の文字を書くワークショップ
関連企画	500,000	▲ 6,000	494,000	494,000	0	アレッシア・ローロ写真展“The matter”初日トークセッション、宇都宮大学共同研究
合計	19,000,000	▲ 1,331,353	17,668,647	9,061,354	8,607,293	

(経済対策事業) 観光商工課事業

	予算・決算			財源内訳		主な内容
	予算額	補正額	支出額	国補助	町負担	
広報プロジェクト	3,000,000	0	3,000,000	3,000,000	0	土祭 2021 ガイドブック(ヒジサイノート)制作、ウィンドウアート、ウェブサイト構築ほか
	1,000,000	▲87,000	913,000	913,000	0	映像制作
住民プロジェクト	1,500,000	0	1,500,000	1,500,000	0	住民プロジェクト 19 企画
ツーリズム	500,000	0	500,000	500,000	0	アクティブバイク&トレッキングツアー in mashiko
食育・食文化	1,000,000	0	1,000,000	1,000,000	0	小麦プロジェクト、地ビールプロジェクト、ましこ野菜&合鴨農法のお米給食プロジェクト
陶芸・手仕事	8,000,000	▲6,845	7,993,155	7,993,155	0	つちかまうつわ、オープンアトリエ、益子焼陶板アート、土人形、光る泥団子
セミナー	生涯学習課事業		—	—	—	日本遺産かさましこセミナー、かさましこ文化財公開
ランドスケープ	建設課事業		—	—	—	ランドスケープツアー、ワークショップ
合計	15,000,000	▲93,845	14,906,155	14,906,155	0	

1-5 土祭実行委員会事業費 [予算・決算]

収入の部 19,424,816

支出の部 17,668,647

差引金額 1,756,169

(収入の部)

(単位：円)

	項目	当初予算額	補正額	収入額	概要
1	町交付金	19,000,000	0	19,000,000	土祭実行委員会事業交付金：7,000,000 円 観光地域づくり実証事業交付金： 8,000,000 円 益子町映像配信によるタウンプロモーション事業交付金：4,000,000 円
2	販売収入		229,543	229,543	公式コレクションファイル 443 冊： 221,500 円 ウェブストア販売送料等
3	参加料		140,000	140,000	縄文太鼓制作ワークショップ
4	雑入		55,273	55,273	販売手数料、利息など
	合計	19,000,000	424,816	19,424,816	

(支出の部)

(単位：円)

	項目	当初予算額	補正額	支出額	概要
1	報償費	3,161,000	▲ 1,246,404	1,914,596	会議謝礼、スタッフ謝礼等
2	業務委託料	8,520,000	3,120,173	11,640,173	アート作品展示業務、展示スタッフ業務、 記録写真撮影業務等
3	旅費	200,000	70,102	270,102	アドバイザー、視察時の交通費、宿泊費等
4	備品・消耗品 原材料費	4,355,000	▲ 2,536,813	1,818,187	事務用・会場設営用の消耗品等
5	通信運搬費	214,000	304,228	518,228	広報物郵送料、事務局用携帯代等
6	使用料・賃借料	730,000	82,006	812,006	会場賃借料、水道光熱費等
7	修繕費	100,000	60,160	160,160	展示会場や備品の修繕費等
8	保険料	100,000	7,760	107,760	イベント保険
9	雑費	120,000	39,823	159,823	振込手数料、販売手数料等
10	食糧費	0	267,612	267,612	協力者、スタッフ用お弁当代等
11	予備費	1,500,000	256,169	0	
	合計	19,000,000	424,816	17,668,647	

《実施の経緯と概要》

・収入は、予算 19,000,000 円から 424,816 円増の 19,424,816 円となった。増額となったのは、主に公式コレクションファイルの販売収入、縄文太鼓制作ワークショップの参加料によるものである。

・支出は、予算 19,000,000 円から 1,331,353 円減の 17,668,647 円となった。減額となったのは、主に備品・消耗品・原材料費の支出が予測より下回ったためである。報償費の減額と、委託料の増額については、当初展示受付スタッフは有償ボランティアと想定し報償費に計上していたが、町内業者への業務委託になったことが要因である。

《考察》

新型コロナ感染症の対応で、期間中、企画の延期や中止が相次いだため、予算規模も縮小傾向であった。

1-6 今回の特色

今回は、第5回目となる「土祭 2021」を開催した。過去の土祭では、会期を9月から10月にかけての新月から満月までの2週間程度としていたが、今回は新型コロナウイルスの感染拡大の状況を踏まえ、2021年5月22日（土）から11月14日（日）にかけて長期間の分散開催とした。また当初メイン期間を9月17日（金）から10月24日（日）（金土日祝日のみ開催）と設定していたが、2021年4月時点の新型コロナワクチン接種の遅れや変異型ウイルスの拡大を鑑み、さらなる対策措置として、10月15日（金）までから11月14日（日）までと変更して開催することとした。その結果、開催日数は、過去最長の177日間（うちメイン期間17日間）となった。

開催前年となる2020年から組織づくりに取り組み、開催に向けて検討した。今回の運営体制の特徴としては、特定の分野ごとに部門を設け、それぞれの部門が独自に企画を立案し実行していく仕組みとしたことである。分野ごとの部門ができたことによって、これまで企画として深掘りできていなかった「陶芸」や「食育」などの要素をより具体的に、プロジェクトとして実現していくための実施主体が生まれた。

今回の会場は「益子町内各所」とし、町のほぼ全域で展示や催しを行った。会場を広域化したことによって、多くの方に様々な形で土祭に参加していただき、一緒になって土祭を作り上げていくことができたので、大いに盛り上がった。地域の活性化や再生につながるこうした取り組みが着実に根付いてきている。

2.実績の報告

2-1 来場者数

○総計 会期中（5/22-11/14）の来場者数は 25,909 人であった。

【来場者数】

（単位：人）

	土祭 2021	土祭 2018	土祭 2015	土祭 2012	土祭 2009
常設展示	11,729	32,251	52,089	42,002	—
イベント	9,841	12,975	6,535	10,642	—
小計	21,570	45,226	58,624	52,644	—
関連企画	4,339	728	2,960	—	—
計	25,909	45,954	61,584	52,644	41,000

【企画数】

	土祭 2021	土祭 2018	土祭 2015	土祭 2012	土祭 2009
常設展示	11	17	19	18	10
イベント	44	12	13	10	6
小計	55	29	32	28	16
関連企画	6	9	15	40	86
計	61	38	47	68	102

《考察》

企画数は前回 38 から増え、61 となった。分野ごとに企画運営部門を立ち上げたことと、会期が長期化したことが要因と考えられる。

総来場者数については、過去土祭で来場者の多かった「夕焼けバー」や「土祭食堂」などの飲食イベントの自粛や、会期中の新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の発令による人流の減少による影響が大きく、25,909 人と伸び悩んだ。プロジェクト実施に際しては、国や県のガイドラインに基づいた「土祭開催におけるコロナガイドライン」を定め、町民、来場者、関係者に広く周知した。

2-2 来場者の満足度

【回収内訳】

- ・回答者数 636 件（用紙回答 609 件 95.6%・オンライン回答 27 件 4.4%）
- ・回収箇所 土祭総合受付・企画展示会場（受付有）・ワークショップ・ツアー等受付

【属性データ】

- ・性別 | 女性 62.6% 男性 35.9% 無回答 1.5%
- ・年齢 | 10 歳代以下 2.6% 20 歳代 10.8% 30 歳代 15.0% 40 歳代 21.9% 50 歳代 21.2%
60 歳代 14.2% 70 歳代 11.9% 80 歳代以上 2.4%
- ・居住地 | 町内 40.4% 県内（益子町を除く）34.1%
県外 25.5%（①茨城県 8.5% ②東京都 7.1% ③埼玉県 2.4% ④千葉県 2.2% 他）

【居住地データ】

(単位:%)

	町内	県内	県外	回答数
土祭 2021	40.4	34.1	25.5	636
土祭 2018	58.5	18.9	22.6	111
土祭 2015	15.1	28.2	56.7	411
土祭 2012	19.6	32.6	47.8	684
土祭 2009	31.6	29.9	38.5	1,203

【満足度データ】

(単位:%)

	とても満足	まあまあ満足	あまり満足 しなかった	満足 しなかった	回答数
土祭 2021	59.8	39.3	0.9	0.0	343
土祭 2018	21.0	63.2	12.3	3.5	111
土祭 2015	53.3	43.6	2.4	0.7	411
土祭 2012	55.7	38.7	5.6	0.0	684
土祭 2009	48.4	51.6	—	—	—

《成果と考察》

来場者アンケートについては、①経済波及効果調査（n=636）②満足度調査（n=343）を実施した。②満足度調査はメイン期間（10/15～）において調査項目を追加し実施したため回答数に差が生じている。

アンケートの回答手法については、①用紙回答 ②オンライン回答で行ったが、用紙回答が全体の 95.6%を占めており、オンライン回答については周知が徹底しておらず浸透しなかった。

来場者の居住地区分は、町内 40.4% 県内（益子町を除く）34.1% 県外 25.5%であり、県内からの来場者数割合が高かった。コロナ禍による、都道府県間の不要不急の往来制限の影響もあったと考える。

満足度調査については、①とても満足 59.8% ②まあまあ満足 39.3% ③あまり満足しなかった 0.9% ④満足しなかった 0.0%であり、来場いただいた方の 99.1%に満足いただけた結果となった。

しかし、自由記載事項として「会場・サインがわかりにくい」「情報発信の仕方や分かりやすいマップが必要」などの意見があり、催事を開催するにあたっての共通の課題提起となった。

2-3 経済波及効果

土祭 2021 の開催が地域経済に及ぼす経済波及効果を算出した。

開催年	経済波及効果（百万円）
土祭 2021	306
土祭 2018	763
土祭 2015	1,128
土祭 2012	1,158
土祭 2009	未実施

〈算出基礎〉

- 1) 土祭来場者アンケートにおける滞在（日帰り（県内/県外）・宿泊の別）割合、1人あたりの消費額（交通・飲食・購買・宿泊）を算出
- 2) 土祭来場者 25,909 人に換算し、直接効果額を算定
- 3) 直接効果額を基に、総務省統計局「産業連関表」を用いて間接効果額を算出
- 4) 直接効果額+間接効果額により経済波及効果額を算出

《土祭 2021 経済波及効果目標値》

新型コロナウイルス感染拡大の影響による人流制限や開催イベントの制限による来場者の減少を想定し、前回開催された土祭 2018 の来場者数を基準として、夕焼けバー・土祭食堂の来場者数を減し、観光客入込数（益子町観光商工課調べ）の平成 30 年と令和 2 年を比較した全体の減少率 64.99% を乗じて来場者数目標値を 26,000 人と算出し、それに基づき経済波及効果 363 百万円と設定している。

《考察》

土祭 2021 における来場者の傾向としては、日帰り（県内）70.1%・日帰り（県外）19.0%、宿泊 10.9%であり、県内近郊からの日帰り滞在の割合が大きいことが分かる。これにより、宿泊費・交通費の消費は直接的に下がり、間接的に飲食・購買消費への影響も想定される。

さらに、土祭 2018 から比較すると、来場者数（45,954 人→25,909 人）43.6%の減、1 人当たりの消費額平均（16,764 円→12,327 円）26.5%減となっており、全体的な入場者数の減少と、1 人あたりの消費額が下がったことにより、前回と比較し経済波及効果が下回ったものと考察する。

会期期間 177 日間で、8 月 8 日～9 月 30 日（54 日間）においては、コロナ緊急事態宣言が発令され来場者が大きく停滞した影響もあり経済波及効果額目標値に達しなかったと考える。しかし、10 月以降のコロナ警戒度レベルの緩和と並行して来場者数も戻り、メイン期間中 10 月 15 日～11 月 14 日（31 日間）の来場者数は全体の 64%を占め、経済波及効果への一定の成果に繋がる要因となった。

来場者を基にした経済波及効果のほか、土祭の全体事業費（決算額 32,574,802 円）における経済効果として、事業費の 73.1%が町内事業者（個人）への支出となっており、町内循環による経済波及効果にも繋がっている。

2-4 公式コレクションファイル販売と配布実績

【金額】

（単位：円）

	公式コレクションファイル (パスポート付)	ガイドブック (パスポート付)	ガイドブック	パスポート	合計
土祭 2021	221,500	—	—	—	221,500
土祭 2018		687,000	—	—	687,000
土祭 2015		—	487,704	932,500	1,420,204
土祭 2012		—	—	2,273,000	2,273,000
土祭 2009		2,514,500	6,900	—	2,521,400

【冊数】

○販売数

（単位：冊）

	公式コレクションファイル (パスポート付)	ガイドブック (パスポート付)	ガイドブック	パスポート	合計
土祭 2021	443	—	—	—	443
土祭 2018		687	—	—	687
土祭 2015		—	626	1,865	2,491
土祭 2012		—	—	3,605	3,605
土祭 2009		3,010	69	—	3,079

○配布数

(単位：冊)

	公式コレクションファイル (パスポート付)	ガイドブック (パスポート付)	ガイドブック	パスポート	合計
土祭 2021	※ ¹ 550	—	22,682	—	23,232
土祭 2018		※ ² 6,636	—	—	6,636
土祭 2015		—	※ ² 6,387	※ ² 6,825	13,212
土祭 2012		—	—	2,502	2,502
土祭 2009		—	—	3,021	3,021

※¹町内宿泊者、関係者、その他に配布※²自治会、関係者、その他に配布

ガイドブック（ヒジサイノート全5号）無料配布数

	NOTE.1	NOTE.2	NOTE.3	NOTE.4	NOTE.5	合計
土祭 2021	4,760	4,776	4,512	4,249	4,325	22,622

ガイドブック（ヒジサイノート全5号）ウェブストア販売数（実質送料のみ）

	NOTE.1	NOTE.2	NOTE.3	NOTE.4	NOTE.5	合計
土祭 2021	19	12	12	8	9	60

《実施の経緯と概要》

今回は、無料配布のガイドブック（全5号）を収納できる、公式コレクションファイル（紙製ファイル）にパスポート機能を持たせて販売した。町民へのファイルの販売は行わず（希望者には販売）、スタンプラリー第2弾「アートを巡る編」台紙をパスポートとして配布した。

販売実績は、土祭 2018 の 687 冊に対し、今回は 443 冊で、前回比 64.4%に減少した。

ガイドブックについては、開催期間が長期にわたったため、これまでのように1冊にまとめるのではなく、フリーペーパーという形で、全5回に分けて発行した。

公式コレクションファイルは、期間中に土祭 KENMOKU 広場、観光協会、道の駅ましこにて、メイン期間中に、アート展示会場9か所、町内販売店8店舗で販売した。さらに、土祭ウェブストアにて、送料を見込んだ料金で販売した。またメイン期間後半には、宿泊者特典として、町内の宿泊施設に無料配布を行った。

《成果と考察》

今回はガイドブックにあたるヒジサイノートを無料配布としたため、これらを収納できる「公式コレクションファイル」をパスポートとして制作し販売した。価格設定については前回のガイドブック 1,000 円から 500 円とした。

公式コレクションファイルは、当初お客様にヒジサイノートをコレクションしていただくという趣旨であったが、お客様の満足度を向上させるため、すでに刊行されている分のヒジサイノートを差し込んだ形で販売・配布した。しかしながらその結果、購入時期によって内容物が異なるという状況を引き起こしてしまった。さらに、都度差し込み作業をする手間が発生し、在庫管理が厳しい状況となった。

また今回は開催期間が長期になったが、パスポートの提示が必要されたのは結果的にメイン期間のアート展

示においてのみであった。アート会場の受付スタッフからは、「一人一冊の購入は不必要ではないか」との意見もあり、500 円のパスポートに足る満足感をお客様に与えることができなかったことが推察される。また、町民はすべて無料で入場できるため、公式コレクションファイルの販売を行わなかった（希望者には販売）が、誤って町民に無料で配布する事例が数件起こった。

以上より、販売する時期によって内容物が変わらないようにすること、また配布時の作業量の軽減、在庫管理のしやすさについて改善の必要がある。また町民への配布についても課題である。今回の場合は、土祭のパスポートという形でなく、アート展示の入場券を各アート会場で販売することが最も明快な方法であったのではないかと考察する。

3.各企画における報告

【A】地域づくり

【A-01】田野地区

《実施の経緯》

2020年10月、前回の地区委員に呼びかけを行い、第1回地区会議を開催。前回の良かった点・悪かった点を振り返るところから始め、土祭の関わり方や、体制作りについて話合った。世代交代の必要性もあると考え新しいメンバーの呼びかけなどを行うこととした。またコロナ禍での開催に関する意見交換を重ね、感染状況の変動に注意しながら自分たち自身の祭りにする為の構図を構築していくことで決定した。

《概要》

○たのひじ展

内 容：田野地区で受け継がれてきた祭事や特色などをパネルで紹介する展示企画。

実 施 日：10月15日（金）～11月14日（日）

会 場：道の駅ましこ

経 緯：土祭 2018 の田野地区企画を参考に、(1)演奏会(2)夕焼けバー代替え市場(3)パネル展示(4)ボタリング(サイクリング)スポットの展示紹介などを8月、10月に分散して開催することを検討。(1)演奏会はお囃子や一般参加者を公募しライブ配信の導入を検討し、(2)夕焼けバーの代替え市場では物販を検討。飲食提供は行わない。(3)パネル展示は前回の各地区紹介パネル活用し、その中に(4)スポット紹介を入れ込んで検討。コロナの警戒レベルを考慮し、開催の判断を7月に決定するとした。

成果と考察：田野地区委員内でコロナ警戒度レベルに合わせてそれぞれの企画開催を判断。7月10日を判断基準日とし(1)演奏会(2)夕焼けバー代替え市場は開催を見送り、(3)パネル展示(4)スポット紹介は感染リスクが低いと考え『たのひじ展』として道の駅ましこで開催することで決定。前回使用したパネルの画像や情報を更新し、神社などボタリングスポットとして巡れる場所にはQRコードを表示したマップも展示した。田野地区内それぞれの歴史ある祭りの文化や伝統、神社などの建造物などを広く知ってもらう機会となった。

【A-02】益子地区

《実施の経緯》

2021年3月1日、第1回地区会議を開催。その後、地区会議は同年10月までに全10回にわたって開催した。益子地区では、メンバーの多くが今回の委員として初参加だったため、まず土祭の趣旨や企画の進め方について意見交換をした。検討段階の企画アイデアとしては、土俵づくり、商店街通りのライトアップ、日干しレンガづくり、フラッグづくりなどが挙げたが、適した会場がないなどの事情により実施を見合わせるようになった。

《概要》

○昔の街並みと子どもの遊び～駄菓子屋開店～

内 容：益子の本通りの高齢者の方たちに昔の街並みや子供の遊びについてお話を聞く会を設け、そのお話をもとに、多世代が一緒に楽しめる企画を実施。

実 施 日：展示「昔の街並みと子供の遊び」 10月9日（土）～30日（土）※月曜休
催事「駄菓子と遊びのお店」 8月13日（金）～15日（日）※中止

会 場：ヒジノワ cafe&space

経 緯：地域コミュニティヒジノワ cafe&space が益子地区委員会とともに計画した企画。真岡鐵道益子駅から、城内坂通りまでの「旧市街地」のエリアを中心に、全5回にわたって、高齢者の方たちに、昔の街並みや暮らしの様子、どんなところで、どんな遊びをしていたのか、お話を聞く機会を設けた。そのお話をもとに、夏休み期間に、子どもから高齢者までの多世代が一緒に楽しめる企画を計画した。「展示企画」と「駄菓子屋・昔の遊びワークショップ」の2本立ての予定だったが、感染拡大に対応し、展示のみを10月に延期して実施した。

成果と考察：感染症拡大の影響で企画の規模を縮小せざるを得なかったが、本企画は地域のこれからを考えるために重要な意味を持つと思われる。本企画の成果として冊子をつくり、自治会や調査協力者に配布した。この冊子によって聞き取り調査の記録などがより多くの方々の目に触れる機会が生まれ、この地域の歴史や文化の継承につながったと思われる。

○益子駅おもてなし企画

内 容：関連企画「営みと暮らしの共有を通じたまちづくり／まちのデザイン」～本通り界隈の活性化への取組み～との関連研究として、本通り商店街の起点でもある鉄道玄関口「益子駅」でのおもてなし企画を実施。観光協会広報委員会との共同研究企画。

実 施 日：11月11日（木）

会 場：益子駅舎多目的室

経 緯：2021年5月に益子町と宇都宮大学が「営みと暮らしの共有を通じたまちづくり／まちのデザイン」～益子本通り界隈の活性化への取組み～に関する共同研究契約を交わしたことをきっかけに、土祭の志にもある「ひとつひとつの魅力ある地域を創る」に沿った研究企画の検討を行った。その中で、土祭益子地区と益子町観光協会広報委員会との共同企画により「益子駅おもてなし企画」が提案され、宇都宮大学が監修に入りワークショップ・研究発表を実施した。

成果と考察：益子駅おもてなし企画は、「益子駅を観光客や町民も集える本通りの拠点として活用したい」をテーマに、自治会長・地元協力者・高校生等が集まりワークショップを実施し、「益子駅がこうなったらいい」「こんなことができる」等の意見をもとに、益子駅の利活用研究発表を行った。この研究を基に、構内掲示物やテーブル・イスのレイアウトの変更や、案内板（ピクトグラム）を設置した。今後については、益子町観光協会広報委員会が中心となり、地元関係者と協力し事業継続される。

A-03】七井地区

《実施の経緯》

土祭 2018 で関わっていただいた地区委員に連絡をし、2020 年 8 月に地区会議を行い 2021 年の土祭開催に向けての会議を行った。会議の中で、土祭 2021 のメインの会場を小宅古墳群とした。

当初、菜の花プロジェクトではプレ企画として菜の花、桜の時期に行うイベントを企画していたが、コロナ禍の状況により中止とした。子供たちが地域で遊べる企画をメインにプロジェクト内容を協議した。

《概要》

○菜の花プロジェクト

内 容：桜や菜の花の名所となっている小宅古墳群で菜の花の刈り取りと菜種取りを実施し、菜種から絞った油を 10 月に販売。また 9 月中旬から開花する「彼岸花」の PR イベントを計画した。

実 施 日：6 月 5 日（土） 菜種取り

10 月 16 日（土）演奏会（七井地区お囃子会・オカリナ演奏等）※中止

10 月 16 日（土）販売 ※中止

会 場：小宅古墳群

経 緯：当初は 4 月の花見の時期にイベントを開催し、菜種摘みとりへの参加者を募る計画をしていたがコロナの感染状況を鑑み、菜種の摘み取りの一般参加は募集せず、実行委員のみで行った。6 月 5 日に菜種取りを行い約 40 人が参加し、2 時間半で約 100 キロを収穫した。当初、アートの縄文太鼓演奏会を 10 月 16 日に予定しており、その時に七井地区の食プロジェクト、竹細工プロジェクトとともに演奏会を計画していたが、緊急事態宣言の発出により、食プロジェクト竹細工プロジェクトの中止を決めた。そのため、演奏会も中止になった。販売は 10 月 31 日の小宅古墳群で行われる縄文太鼓の演奏会の際に、小宅古墳群を拠点に活動するユニット「Neharu」のポップアップショップで販売された。

成果と考察：菜種取りは例年、亀岡八幡宮里山の会の手で行われているが、土祭のイベントとして行うことで、今回が初参加の方も多かった。また種取りの様子が新聞に掲載されたことで、この場所の魅力や、里山の会の活動をより多くの方に周知することができた。

○里山プロジェクト

内 容：農夫や農作業の様子、七井地区に生息する動物などを模したパネルをベニヤ板で作成し、小宅古墳群に展示

実 施 日：9 月 15 日（木）～11 月 14 日（日）

会 場：小宅古墳群

経 緯：来場者の撮影スポットとして、小宅古墳群の風景の中に、周辺動物や、縄文・古代・現代を表現するパネルの展示を行う。制作については、8 月 21 日、22 日の 2 日間において、七井地区委員 8 名がそれぞれ工具を持ち寄り手作りで製作した。原画はデザイナーにお願いし、型取り、切り抜き、組み合わせ、色塗りまですべて手作業で行った。元建材工場の

跡地を利用して制作を行った。

成果と考察：9月12日～11月21日の期間において展示を行った。小宅古墳群の丘陵地に、この土地にゆかりのあるパネルが設置され来場者の目を楽しませた。小宅古墳群が最も賑わうのは、菜の花と桜の時期であるが、オフシーズンの来場につながる新たな企画としてパネル展示を行うことができた。今後、4月の花見の時期にも、今回使ったパネルを再利用しての展示計画をしている。

○食プロジェクト

内 容：小宅地区の竹を使って、お米を炊くワークショップを実施。

実 施 日：10月16日（土）※中止

会 場：小宅古墳群

経 緯：本企画は、七井地区が考える「食育・食文化」の取り組みとして立ち上がったもので、亀岡八幡宮里山の会と町生涯学習課が取り組んでいた「小宅古墳群の竹をつかって竹飯盒をつくり、お米を炊く」という催しを土祭で行うこととなった。ところが8月に入ってコロナ警戒度レベルステージ4（緊急事態措置）の状況となり、参加募集を行うことが困難な状況となり、先の見通しがつかないことから中止を決定した。

成果と考察：竹飯盒の体験を通じて、食育や里山資源の有効活用など多くのことが学べるきっかけになるのではないかと感じた。今回は中止となってしまったが、継続的にこのような取り組みをしていくことが将来的にこの地域やそこに暮らす子どもたちにとって良い影響を生むのではないかと感じた。

○竹細工プロジェクト

内 容：小宅地区の竹を使って竹細工のワークショップを実施。竹に全く触れたことがない方でも体験することができ、自分で作った竹細工は持ち帰れる。

実 施 日：10月16日（土）※中止

会 場：小宅古墳群

経 緯：「小宅古墳群にある竹をつかって、子供たちが楽しめることができないか？」というコンセプトから生まれた企画で、モノづくりのプロである職人気質の地域の方の協力により、竹トンボと竹カエルを子供たちと一緒に作る計画となった。ところが8月に入ってコロナ警戒度レベル4（緊急事態措置）の状況となり、参加募集を行うことが困難な状況となり、先の見通しがつかないことから中止を決定した。

成果と考察：残念ながら今回のワークショップは実現しなかったが、この企画のためにつくった試作品は、関係者からとても好評だったことから、機会があればまた行うべきだと感じた。地域の方のこうした技術を子どもたちに伝えていくことが、ふるさと教育の一環として大変有意義なものになるのではないかと感じた。

【B】住民プロジェクト

《実施の経緯》

実行委員会で執り行われる企画とは別に、町民が自ら参加できる企画募集を行うとし、「フリンジ」や「手仕事村」などこれまでの土祭でも開催されてきたものを参考に、今回は土祭 2021 のコンセプト「アラワレル 未知ノ日常。」に合った企画を募集するとした。コロナ禍の状況を鑑み、場所を一か所にまとめずにそれぞれの場所での開催とした。

《概要》

No	プロジェクト名	種類	主催者	開催場所	概要
1	星宮神社に星をちりばめよう	展示	K I N T A	星宮神社	星宮神社の境内につり糸に白い紙（星）を貼り木々の間に張り巡らせるワークショップ。
2	土から学ぶ環境問題～"土"しか勝たん～	体験	福田真由	ましこラボ	植物、土、環境問題を考えるワークショップ。
3	益子焼の多様な可能性 タイル店&ワークショップ	展示	藤原陶房	藤原陶房ビュイン グループ	益子焼の多様性を伝えるワークショップ・展示。
4	益子参考館円座 昔ながらの民家	体験	濱田雅子	濱田庄司記念 益子参考館	土壁の説明と、荒壁用の土づくり、荒壁塗りなどを体験。
5	明水の土祭メニュー (土祭オリジナルメニュー)	飲食	そば明水	そば明水	限定オリジナルメニュー「ねばねばぶっかけ蕎麦」の提供。
6	MashikoBito 土祭オリジナルランチ (土祭オリジナルメニュー)	飲食	cafe マシコビト	cafe マシコビト	限定オリジナルメニュー「ヒジビザ～土からもらった恵みのビザ」の提供。
7	ヒジノワ秋の収穫祭 in 土祭 2021 (土祭オリジナルメニュー)	飲食	ヒジノワ cafe&space	ヒジノワ cafe&space	益子町の食材にこだわった限定メニューの提供。
8	本通り竹の燈プロジェクト	展示	中山久美	益子本通り・ 内町屋台パーク	竹灯籠を店先に展示。
9	郷土料理を食べよう (土祭オリジナルメニュー)	飲食	(株)ましこ カンパニー	道の駅ましこ	郷土料理（法度汁）の提供。
10	ちとせの煮豚丼 (土祭オリジナルメニュー)	飲食	とんかつちとせ	とんかつちとせ	限定オリジナルメニュー「煮豚丼」の提供。
11	里芋の揚げ出しとまぐろぶつ定食 (土祭オリジナルメニュー)	販売	和食仙	和食仙	限定オリジナルメニュー「里芋の揚げ出しとまぐろぶつ定食」の提供。
12	農を知り、食を現す (土祭オリジナルメニュー)	飲食	Cafe Novel	Cafe Novel 東側建物	益子町のお米や野菜、果物を使用したランチ BOX、自家製ドリンクの販売。
13	伝統工芸竹細工と栃木レザーの融合	販売	Crafty	Cafe Novel 東側建物	伝統工芸竹細工カゴバックと栃木レザーを融合された作品の販売。
14	益子を描く	展示	四々舎	Cafe Novel 東側建物	益子にまつわる益子焼や食・農を取り入れたデザインの T シャツやグッズの販売。
15	えのきだ窯 -茶の間でつくる器-	販売	えのきだ窯	Cafe Novel 東側建物	急須の良さを伝える展示と、販売。

No	プロジェクト名	種類	主催者	開催場所	概要
16	Nest 天然木材を使った作品の販売	販売	Nest	Cafe Novel 東側建物	伝統的な技法を使った天然木工で制作した作品を販売。
17	ましこ産西洋野菜の普及と未来の農と食を考える	販売	ましこ西洋野菜研究会	Cafe Novel 東側建物	益子で活動している若手農家の西洋野菜を販売。
18	おうちで見よう益子花火	体験	上を向いて♪ 益子	益子西小東側の 田んぼ	打ち上げ花火の実施。
19	益子ヤギの集い	体験	(株)ましこ カンパニー	道の駅ましこ	芝生広場に一同に介したヤギと触れ合う企画。

《経 緯》

6月から企画の募集を開始。8月頃からのコロナ警戒度レベルの変動に伴う「屋外での飲食販売」を実施したい旨の相談や問い合わせがあったが、飲食販売をとまなう企画の実施は見送りとした。土祭感染におけるコロナウイルスガイドラインに合わせて、コロナ禍においても実施できる内容のもの、アフターコロナで今後の観光に繋げていけるものとして、最終的に19の企画の支援を行った。

《成果と考察》

全19企画で2,170名のお客様の来場があり、観光客の誘引に寄与することができた。また、コロナ感染予防や入場者管理等を行うことができるマルシェ形式の企画を実施し、コロナ禍やアフターコロナに向けた販売イベント等の有り方についての検証や、今後も継続して実施できるような座組みの形成と、人材育成（仲間づくり）に繋げることができた。

【C】アート

《実施の経緯》

出展アーティスト及び会場の選定は、アート部門ディレクター藤原彩人に一任した。2020年9月に踏査を実施。同年10月に展示計画「ART 土祭 2021PLAN」を練り上げ、「感性の土壌」というコンセプトと、『丘で踊る』、『森で歩く』、『7つの神社を巡る』、『大地で遊ぶ』という4テーマが決まった。同年12月から翌年4月にかけて、アーティストを招いた現地確認や関係者間のミーティングなどを行った。会場及び駐車場の使用に際して、地権者との交渉は主に土祭事務局が担当した。

《概 要》

○感性の土壌「丘で踊る」

内 容：北海道で活動するジャンベ奏者 茂呂剛伸（縄文芸術文化財団）を招き、縄文太鼓制作ワークショップと、小宅古墳群での演奏会を行った。

実 施 日：5月23日（日） 縄文太鼓制作ワークショップ

10月31日（日） 小宅古墳群と縄文太鼓の演奏

会 場：縄文太鼓制作ワークショップ 陶芸メッセ・益子 陶芸工房

小宅古墳群と縄文太鼓の演奏 小宅古墳群

経 緯：2020年12月にジャンベ太鼓・縄文演奏家の茂呂氏を招き、会場となる小宅古墳群を視察した。また縄文太鼓ワークショップで使う土や、北海道益子間の作品の運搬方法などについて打ち合わせた。翌年5月、茂呂氏が再来町した際に益子町で活動するジャンベ団体「ジ

「エベナッツ」とのセッションを行った。演奏会当日は小宅古墳群を拠点に活動するユニット「Neharu」の監修で、会場内でもてなしイベントを行った。ステージの設営や会場の設えは亀岡八幡宮里山の会のご協力を得て進めた。

成果と考察：縄文太鼓制作ワークショップの参加料は5,000円と、他のワークショップと比較し高額だったが、予約は定員数に達した。（当日キャンセルあり）感染症防止対策により、演奏会の日程や場所がなかなか確定できず、ワークショップ参加者から不安の声が寄せられた。日時や場所を早めに確定することはもちろん、それができない場合でも、参加者に対して、こまめに連絡をとる必要があると感じた。演奏会は悪天候（雨のち曇り）にも関わらず、多くの来場者が訪れ盛況であった。運営上も大きな問題は発生せず、来場者及び出演者からは満足の声が寄せられた。

○感性の土壌「森を歩く」

内 容：小田桐奨と中嶋哲矢によるユニット「L PACK」によるプロジェクト。森の入口にある杉林に「この森は、とある陶芸家の土地であった」という仮説を立て、古くから言い伝えられた様々な益子の民話をミクストし作られた物語を軸にプロジェクトを展開した。

実 施 日：10月15日（金）～11月14日（日）の金土日祝 展示

11月13日（土）、11月14日（日）イベント

会 場：益子向原の杉林

経 緯：土祭2018に会場となった「城内坂大階段」から「円道寺池」を経由して「ワグナー・ナンドールアートギャラリー」に延びるコースを今回の展示では活用した。林道は「益子花の会」のご尽力によって整備された。2021年3年5月にL PACKが現地確認を行い、8月から10月にかけて数回の滞在制作を旧小宅小学校で行った。モーニング企画は10月2回、11月2回実施する予定だったが、土祭開催におけるコロナウイルスガイドラインに基づき10月の開催は中止とし、11月2回のみ開催となった。

成果と考察：展示は森の中が会場ということでアクセス面に懸念があったが、経路上に所々のぼり旗を配置することで、目的地にたどり着けなかったという事態は起こらなかった。

また「いつもより早く起きたり、いつもと違った場所でモーニングを食べたりすると、世界が変わるかもしれない」というコンセプトで実施したイベントは、1日目の参加者がSNSに投稿した記事をみて、2回目に予約する方が増えるなどの反響があった（2回目の予約はほとんど埋まった。）ことから、益子の朝の魅力を伝えるのに効果的であったと思われる。

○感性の土壌「七つの神社を巡る」

内 容：町内7つの神社を会場にそれぞれアート作品を展示した。

参加アーティストは、仲田智、生井亮司、KINTA、古川潤、中崎透、浅田恵美子、ダグラス・ブラック、川崎義博の8名。

実 施 日：10月15日（金）～11月14日（日）の金土日祝 ※町民を対象に一部展示を平日公開した。

会場：八幡神社(長堤)、八幡神社(山本)、星宮神社、綱神社、太平神社、御霊神社、亀岡八幡宮
経緯：これまでの土祭に関わってきたアーティストが町内7つのエリアそれぞれの神社にアート作品を展示する企画。2021年3月にアーティストの意見交換会を実施した。会場への作品設置は、メイン期間の2週間前から前日にかけて、各々行われた。メイン期間中の電源の管理や扉の開閉などは主に展示スタッフや事務局員が行い、作品・会場のメンテナンスはアーティストとアートディレクターが行った。当初、展示時間をメイン期間中(金土日祝日)に限定していたが、平日及び時間外にも見ることができる展示については、町民向けに公開することとし、防災無線で告知した。作品の撤去は11月中にすべての会場で完了した。

成果と考察：町内7つのエリアに展示することによって、普段、観光客が足を運ばない場所に人が集まるきっかけとなった。会場が離れているので、展示会場を回るほとんどの方が自動車であったが、レンタサイクルで移動するグループがいくつかあった。7つの神社を会場としたことで、町内のどこに住んでいても自宅から近いところでアートが見られる環境ができた。実際に「町民でさえ、初めて訪れる神社があり、新たな発見があった」という声も聞かれたように、これまで土祭とはあまり関わりがなかった町民の方が、土祭を身近に感じる端緒となったのではないかと考えられる。課題としては、近隣住民への周知徹底が十分ではなかった点が挙げられる。事前訪問(不在の際は書き置き)による説明を行うことで周知を図ったが、期間中に「展示があることを知らなかった」というご意見があった。より早い段階において広範囲に周知を行うことが必要である。

また運営面の課題としては、参拝目的の入場であれば、パスポートを不要としたため、パスポートを購入して入場される方との不公平感が生まれたことが挙げられる。作品の設置場所や、入場方法について不公平感が生まれないように仕組みを検討する必要がある。

○感性の土壌「大地で遊ぶ」

内容：ストリートカルチャーを切り口するアートプロジェクトを展開する「SIDE CORE(高須咲恵、松下徹、西広太志)」による展示を行った。このプロジェクトに関連して野焼き、ナイトウォークなどのイベントも実施した。作品協力アーティスト：浅田恵美子、石毛健太、岩村吉景、大塚一弘、川田知志、木村文子、毛塚友梨、須釜美和、外山慧、杉本美和子、竹下鹿丸、トキマツヨシミ、藤原彩人、横山充、BIEN、DAISAK、DIEGO、JANGO。

実施日：10月15日(金)～11月14日(日)の金土日祝

会場：元平野スタンド

経緯：2021年3月にSIDE COREが益子に来町し、縄文時代の遺物が出土している丘陵地や、旧市街地などでリサーチを行った。10月に再来町し、展示につかう陶器をつくるために野焼きを七井地区で行った。メイン期間中は、夜の益子を巡るナイトウォークを実施した。会場となったのはガソリンスタンド跡地で、日没後に展示を行った。

経緯と成果：このプロジェクトは他のアート展示とは異なり、夜の時間帯で展示を行った。これは、夜の時間帯での展示会場を設けることで、コロナ対策として来場者の分散を図る目的に加え、

これまでの土祭で「展示会場を受付時間内に全部まわることが難しい」といった意見があったことを受けて、受付時間に間に合わなかった来場者にも楽しんでもらう効果を期待して実施した。来場者アンケートでは、40%以上が「初めて土祭に訪れた」と回答しており、展示時間を夜としたことで、これまでの土祭とは少し違ったターゲット層（若者や都市住民）に対して、一定の訴求力があつたのではないかと推測される。課題としては、ナイトウォーク企画の情報集約が直前となつてしまったため、予約サイトのみの掲載となつてしまい、告知が不十分であつた点が挙げられる。

【D】空間会場づくり

《実施の経緯》

土祭伝統の竹を使った「のぼり旗」の設置や会場全体の装飾、及び各企画の案内（垂れ幕）の設置などを担当。益子商店街をメインに『葉付き竹』の飾りつけや、町民に『素焼き飾り』を作ってもらいメイン期間に向けて飾りつけていくなどの要望が実行委員会からあり検討することとした。また会期が長期に渡ることから企画が行われていない期間の装飾についても話し合いを重ねた。

《概 要》

○白旗に「土祭」の文字を書くワークショップ、のぼり竿講座とワークショップ

内 容：のぼり旗の制作を通して「竹」にまつわる地域課題・地域の人々・地域の動きを知るワークショップを開催。

実 施 日：7月31日（土） 白旗に「土祭」の文字を書くワークショップ
9月23日（木・祝） のぼり竿講座とワークショップ ※中止

会 場：白旗に「土祭」の文字を書くワークショップ 町民センター総合体育館
のぼり竿講座とワークショップ 道の駅ましこ（多目的室）および近隣の竹林（長堤）

経 緯：これまで「のぼり旗」は、七井・益子・田野地区にそれぞれ60本程度制作を担当してもらっていたが、コロナ禍の中での参加呼びかけの難しさや負担軽減を考慮し、空間・会場部門が主体で行うことにした。少人数制の町民参加型のワークショップとして企画することとした。『白旗に「土祭」の文字を書くワークショップ』及び『のぼり竿講座とワークショップ』として参加者を募集。ワークショップを通して、のぼり旗のみならずさまざまな竹の可能性を探るとした。

成果と考察：『白旗に「土祭」の文字を書くワークショップ』は書道経験のある町民の方に講師として指導を依頼し9名の参加者で100枚の旗を制作した。『のぼり竿講座とワークショップ』はコロナ感染状況から関係者のみで行った。事前に整備が行き届いていない竹林を町内から公募。選定にあたっては竹林の状況や竹材をのぼり旗へ転用する事を鑑みつつ観察を行った。選定した竹林にて、整備と、のぼり竿制作を実施。整備を行った竹林の持ち主からは、喜びの声をいただいた。のぼり旗の組み立て制作はシルバー人材センターの方にもご協力いただき関係者で制作した。企画が分散開催されることから会場全体には装飾はあまり行わず、企画近辺で旗が目印になるように設置した。

【E】住民参加の広報プロジェクト

《実施の経緯》

土祭 2018 の自主アンケートの声より「住民不在」「アート展示企画をもっと住民に開いてほしい」「住民が楽しめるものが少ない」などの意見があった。人通りの少なくなった町を元気にすることや話題を作り、子供たちに楽しい機会を作ることを目的にウィンドウアートプロジェクトは生まれた。ヒジサイノート表紙プロジェクトは益子在住（出身）のクリエイターへスポットライトを当てることが目的。レポーター養成プロジェクトは小さな雇用と今後の活動に生かすことができるスキルを養うために生まれた。

《概要》

○ウィンドウアートプロジェクト

内 容：まちなかの店舗や施設のガラス面に、キットパス(ガラス面用 16 色の筆記具)で絵を描く。
参加クリエイターは小野優子、マツナガレミ、加藤靖子、飯山太陽、堀水小夜、ながみともみ。企画運営は、町内事業所である地域・店舗元気 UP サポート企業「あられ HOUSE」が行った。

実 施 日：4 月 23 日（金）～11 月 14 日（日）

会 場：道の駅ましこ、フォレスト益子、益子焼しのはら、久保邸長屋門、Cafe Novel 東側建物、ヒジノワ cafe&space、d Agora、大宿窯、ましこラボ

経 緯：町内の店舗や施設の窓ガラスに益子のクリエイターたちが、ヒジサイや今回のコンセプト「未知の日常」から想起する「絵」をかき、町を染め、通りを彩り、今年は土祭の年であることを伝えるプロジェクト。益子のクリエイターが表現できる場所を提供する。

成果と考察：コロナの影響で、一般募集をかけ実施したのは 6 月 27 日、7 月 3 日、7 月 4 日、7 月 22 日、7 月 24 日、それ以外は関係者のみで行った。延期などもあったがすべて実施することができた。この企画の影響で会場付近の別の店舗から「自分たちのお店でもウィンドウアートを描きたい」といった声や、保育園から「園児と一緒に絵を書きたい」といったオファーなどがあり、会場周辺で広がりを見せた。

○レポーター養成プロジェクト

内 容：土祭の公式ウェブサイトと併設している「ヒジサイブログ」で記事を更新していく担い手を養成し、土祭 2021 の期間に開催される様々なプログラム取材して記事を作成する取り組み。レポーターは金敷奈穂、鈴木利典、仁平肇、橋口奈津子、松永玲美、横溝夕子、藁谷はる。

掲 載 記 事：100 本

経 緯：今回企画が分散され、多くのプロジェクトをヒジサイブログで発信していくこと、小さな雇用を作ること、そしてそれを自身の今後に生かしていくことを目的とした。今まで企画などの進捗状況などの発信が遅くなってしまったことがあったため、レポーターを集め情報の発信を多くしていく。

成果と考察：コロナ禍の開催ということで、プロジェクトの進捗などを追うのが難しい中、レポーター

がいることによってウェブ上で進捗を発信することができた。ただ、コロナ禍で企画の中止やスケジュールの見通しがつかない企画もあり、事務局とレポーターとの連絡調整に難しい面があった。当初予定していた企画が中止になり記事の本数の調整が必要な場合には、自由コラムという形で調整を行った。会期終了後の土祭レポーター反省会において、レポーターから「全体をコントロールしていく現場の責任者の必要性について」など、改善に向けての貴重な意見や、「やってみて良かったことの方が多かった。人に読まれることを意識して、緊張感をもって文章を書く練習になった。多くを学べた。自分の今後のプラスになる。」という意見もあり、ひとりひとりのスキルアップに繋がっている成果がみられた。

○ヒジサイノート表紙制作プロジェクト

内 容：「ひとのつながり」と「新しい創作活動や仕事づくりのきっかけ」を創出することを目的に、益子のクリエイターたちがメディアづくりに参加するプロジェクト。2021年4月から5回にわたって発行するガイドブック「ヒジサイノート」の表紙制作を、矢津田貴慧、飯山太陽、加守田琳、矢津田玲理、小仁所健太の5名のクリエイターが手掛けた。

経 緯：ヒジサイノート表紙制作プロジェクトは、益子のクリエイターを採用し、イラストを制作するインターンシップのような体験の場をつくる。当初、4月から8月までの毎月発行の予定だったが、コロナ禍で先の見通しがつかない部分があり情報決定が遅れていた。そのため4月、7月、8月、9月、10月の5回の発行変更となった。1号表紙テーマ「再生」矢津田氏、2号表紙テーマ「土」飯山氏、3号表紙テーマ「手の仕事」矢津田氏、4号表紙テーマ「朝」加守田氏、5号表紙テーマ「ひと」小仁所氏、それぞれのテーマに合わせた作品がヒジサイノートの表紙を描いた。

成果と考察：作家の個性が表現された表紙となっており、配布場所の土祭ストアなどで好評だった。具体的にお客様から寄せられた声としては、「このクリエイターを知っているので、ほしくなった」や、「温かみのあるデザインで目を惹かれた」などがあった。このことから今回初めて参加したクリエイターが表紙を担当したことで、新たに土祭に興味をもつ方が増えたのではないかと考えられる。

【F】日本遺産かさましこセミナー

《実施の経緯》

2020年6月19日、笠間市と共同で文化庁に申請した「かさましこ～兄弟産地が紡ぐ“焼き物語”～」が「日本遺産」に認定された。日本遺産とは地域の歴史的な魅力や特色を通じて日本の文化や伝統を物語るストーリーを国が認定したもので、地域に点在する遺産をストーリーによって一体的に活用し、国内外へ効果的に発信することで地域の活性化を図ることを目的としている。日本遺産認定後、笠間と共にかさましこ日本遺産活性化協議会を立ち上げ、人材育成や普及啓発、情報発信事業等を行っているが、このたび土祭と連携し、普及啓発事業の一環として、文化財の特別公開やセミナーを開催する運びとなった。

《概要》

○かさましこ文化財公開

内 容：かさましこ日本遺産構成文化財の中には、常時一般公開を行っていない文化財も多いことから、笠間市・益子町における文化財公開を行い、文化財保護の重要性、文化財の価値や魅力の理解促進により、郷土愛醸成につなげた。スタンプラリーを実施し、4カ所以上巡った方にはポストカードを贈呈した。

実 施 日：10月23日（土）24日（日）

会 場：地藏院、西明寺、円通寺、光明寺、松本コミュニティセンター（公民館）、益子町中央公民館

経 緯：文化財の特別公開をするにあたり、この機会に日本遺産構成文化財になっている場所だけでなく、指定文化財もご覧いただきたいと思い、6カ所の会場を選定した。また、ボランティアの方々にスタッフとして受付補助や文化財解説を担っていただくため、10月9日（土）に午前と午後の2回に分けて事前勉強会を行った。準備物としてチラシやスタンプラリー台紙、ポストカード、のぼり旗、スタンプを作成した。

成果と考察：普段公開されていない仏像・絵画・絵地図などを公開し、有志のボランティアの方々が文化財の説明を行った。中世宇都宮氏一族にまつわる文化財の数々をはじめ、地域にありながらあまり知られていない価値を再発見する機会になった。来訪者の方からまた開催してほしいと要望も出され、盛況のうちに終了した。

○日本遺産かさましこセミナー

内 容：日本遺産に認定された「かさましこ～兄弟産地が紡ぐ“焼き物語”～」のストーリーの内容を転換期ごとに大きく4回（うち1回は中止）に分けてセミナーを開催した。

実 施 日：11月6日（土）第1回 古代編「須恵器から考える食器の原形」

講師 栃木県考古学会顧問 橋本澄朗

第2回 民藝編「民藝運動以前と以降の益子焼」

講師 公益財団法人 濱田庄司記念益子参考館館長 濱田友緒

11月7日（日）第3回 中世編「『かさましこ』の原点、中世の笠間氏と益子氏」

講師 宇都宮短期大学人間福祉学科教授 江田郁夫

第4回 近現代編 ※中止

会 場：つかもと迎賓館

経 緯：日本遺産かさましこのストーリーは大きく4つに分けることができる。その転換期ごとに専門家の方に講演していただくことで、「かさましこ」をより深く理解し、魅力を感じていただきたいと思い開催した。当初予定していたのは8月28日古代編、9月4日中世編、9月5日民藝編、9月20日近現代編であったが、新型コロナウイルスの影響により、古代・中世・民藝編の3つのセミナーについては11月に延期、近現代編は中止となった。

成果と考察：新型コロナウイルスの影響を多分に受けたイベントと感じた。状況の変化に応じてガイドラインが出されていたが、会場が室内ということもあり、ソーシャルディスタンスの

配慮、参加者募集のタイミングで県内のみとするか、人数制限を何名にするかなど検討項目が多いと感じた。しかし、講師や参加者の方々から通常は中央公民館研修室で行っているセミナーであるが、会場をつかもと迎賓館にしたことで趣のある会場で行うこともよいと評価を得ることができた。

【G】食育・食文化

《実施の経緯》

食につながる農業（生産）の段階から、「土祭をきっかけにその先へつなげることをコンセプトに、農と食にまつわる企画を実施する。益子産食材の「生産拡大」と「安心安全な食への関心づくり」の取り組みへとつなげていくことを目的として、この食育・食文化プロジェクトがはじまった。

《概要》

○小麦（パン）プロジェクト

内 容：栃木県産パン用小麦の品種「ゆめかおり」を、益子町4Hクラブ（若手農家が集う農業青年クラブ）が町内の圃場にて実験的に栽培・収穫し、町内のパン屋に食パンの製造を依頼し、町内の学校給食にそのパンを提供し子供たちに食してもらおうプロジェクト。

経 緯：町内産パン用小麦の事業化を目指し実験的に小麦栽培を行う。小麦ができるまでの工程とできた小麦を味わうプロジェクトとして、地元小学生による収穫体験と、自ら収穫した小麦で作られたパンを給食にて食し食育に繋げるプロジェクト。益子町4Hクラブに小麦の栽培をお願いし、収穫まで行うことができた。コロナの関係で地元の小学生らが収穫体験を行うことはできなかったが、益子産小麦を使用したパンの試作を町内事業者の Bourange 770・えみばん・手仕事工房そら・dellffino のほか、学校給食のパン製造を行っている太田屋（真岡市）へ依頼し、商品化し販売まで行うことが出来た事業所もあった。学校給食への提供については、給食分の個数製造ができる加工施設がなく実現できなかった。会期終了後になったが、益子産小麦と野菜を使った「益子を味わう」ピザづくりワークショップを行い、安心安全な町内産食材のPRと、食材としての美味しさを味わう機会を提供することができた。

成果と考察：今回、町内初の試みとして耕作放棄地を利用しての小麦の生産を行い、生産者からは「土壌の整備などを行えばパンとして使用できる小麦の生産を行うことができるだろう」という検証もあり、益子産小麦の生産は継続される方向。今後においては、町内産食材の生産拡大のほか、コロナ禍により実施できなかった収穫体験や、子供たちへの食育学習の推進を図っていきたい。

○地ビールプロジェクト

内 容：ビール大麦生産量全国1位の栃木県。益子町においても、町内産ビール大麦を使用した地ビールづくりを考え、生産から消費までを行う「農商工連携」につなげていく。

経 緯：6月高野農園（東田井）の圃場でビール大麦の生産が始まり、今夏300kgの収穫となった。大麦の収穫についてはワークショップを計画していたが、コロナ禍により行うことができ

なかった。収穫された大麦は約1年間にわたって乾燥・精麦の工程が必要となるため、土祭においては栃木県産ビール大麦を使用しオリジナルビールを製造し販売することとし、2022年春に町内産ビール大麦を使用した地ビールの販売を計画する。

土祭オリジナルビール「HIJI Beer」の味を決めるテイスティングワークショップは、ビール製造元となるファーマーズフォレストと田野地区委員で実施され、10月15日から道の駅ましこでの販売が始まった。12月には益子地区委員の協力を得て、第2弾となる地ビール開発のためのテイスティングワークショップが開催された。

成果と考察：地ビールプロジェクトにおけるビール大麦の生産技術や、ニーズに合った趣向調査については、今後の事業化に向けて活用していけるものとなった。「Hiji Beer」を飲まれた方からは好評な意見をいただいております、販売ルートにおいても、道の駅ましこでの店頭販売のほか、町内の販売店・飲食店のほか、イベント等での取り扱いまで拡大を図っていききたい。今回のプロジェクトをさらに検証し、ほかの町内産食材においても、農業と商工業の互いの強みを活かした新商品の開発・需要拡大に繋がる取組みを継続していく。

○ましこ野菜&合鴨農法のお米給食プロジェクト

内 容：無農薬で育てられた野菜とアイガモ農法で育てられたお米を使用した給食を提供した。益子の野菜のブランディングを兼ねて、町内農家の無農薬栽培野菜の生産拡大と、「安心安全の食への関心づくり」の取り組みへとつなげていく。

実 施 日：10月21日（木）

会 場：町内小中学校

経 緯：学校給食で子供たちに提供することにより、益子町内でどんな野菜が作られているか、また有機栽培・自然栽培とは何かについて興味を持ってもらうことを目的として実施し、将来的に益子産野菜の生産量拡大に繋げていくものとする。益子産野菜と米を使った学校給食メニューを検討し、カレーライス「ヒジサイカレー」の提供に向けて調整が始まった。野菜生産者15件に給食に提供する野菜8品目の生産を依頼し、カレーレシピは道の駅ましこレストランシェフの追立氏が行った。益子町給食センターの協力により、子供向けのレシピ研究や、給食提供に必要な食材の納品量・スケジュールなどの確認を経て益子町内の小学校、中学校1,895食を提供することができた。当初計画していた稲刈りや野菜の収穫イベント等は、コロナ禍により実施することができなかったが、会期終了後に小麦プロジェクトと合わせて「ましこを味わう」ワークショップを開催し、一般参加者による芽キャベツの摘み取りを行った。

成果と考察：今回の取り組みは、給食に提供するにあたっての野菜やお米の加工基準があり検討を重ねることも多かったが、益子町給食センターの協力により実施することができた。学校給食に使われる食材については、ほとんどが益子産食材で提供をする機会がないとの話もあり、今後についても食材流通や、原価コストが安定すれば継続的に実施していきたいとの声があった。生産者からも「自分の子供に自分の作った野菜が給食に出ることがうれしい、自分も食べてみたい」という声もあった。学校給食でヒジサイカレーを提供する際には、米

の生産者「neharu」制作のリーフレット「合鴨農法 山里からの贈りもの」を全児童生徒に配布し、自然栽培とは何かについての食育学習を行い、食・農業への興味、関心に繋がる取組みとなった。

○里山の自然、牧場プロジェクト

内 容：開拓からはじまる牧場を、オープンするまでのプロセスを通じ、子どもたちに「里山の自然と触れ合うこと」と「生き物を飼うことと畜産業への興味」、また「乳製品を活用した6次化への取組み」を学ぶきっかけとしてもらう。

実 施 日：5月22日（土）23日（日）6月19日（土）20日（日）7月25日（日）、11月14日（日）

※9月11日（土）12日（日）は中止

牧場づくりワークショップ

10月23日（土）24日（日）

みんなで楽しく生き物観察会 講師 森林ノ牧場（株）生き物博士 野田航平

11月14日（日）

バターづくり体験&牧場開設についてのお話会 講師 森林ノ牧場（株）代表 山川将弘

会 場：益子森林ノ牧場（益子町大平）、道の駅ましろ

経 緯：5月から実施された牧場づくりワークショップにおいては、地域や一般参加者の協力により草刈りや柵作りが行われ、新たに牧場がオープンするまでの過程を体験。生き物調査においては、手作りした牛乳パックの虫かごを持ってどんな虫が生息しているかの調査を実施した。バターづくり体験では、生乳からバターが作られる過程を体験し食するワークショップが開催され、食育につながる取組みとなった

成果と考察：牧場づくりや生き物調査を通して、「自然と遊ぶこと」「牧場がどう作られていくか」を体験することを入口として、耕作放棄地の問題や生態系のサイクルを学ぶ機会となった。ワークショップ参加者は、地元からの参加者の他、県外からのリピーターの参加も多くみられた。食育への取組みとして実施されたバターづくりワークショップの他、ミルクプリンの商品開発も実施され、6次化産業への進展もあり成果がみられた。

【H】ランドスケープ

《実施の経緯》

益子町ランドスケープ計画をベースに、その計画予定地となっている場所におけるワークショップを企画した。内容と調整については、益子町ランドスケープ計画「風土景」制作者であり、芝浦工業大学准教授の小埜芳秀と建設課での話し合いのもと進められ、田野地区、益子地区、七井地区でそれぞれ1箇所開催することとなった。ワークショップの講師を景域計画(株)、東洋大学、慶應義塾大学に依頼し、内容の充実を図った。また、芝浦工業大学、東洋大学、慶應義塾大学より学生が参加し、各ワークショップにおいては、事前に地元関係者とフィールドワークを行うなど共同作業を目指した。地元関係者との調整等は建設課が担当した。

《概要》

○前沢町有林の植生と、季節による風景の変化と魅力を探るツアー

内 容：前沢町有林の植生の保全と今後の活用につなげるべく、林道を歩きながら植生と風景の解説を行うワークショップを開催した。

講師 東洋大学准教授 伊藤暁、慶應義塾大学教授 石川初

実 施 日：10月23日（土）

会 場：前沢町有林

経 緯：10月23日、前沢町有林を散策し、風景の魅力を発見するツアーを実施した。散策コースは、生田目公民館から生田目古墳群、前沢町有林を経て、郷山カフェひだまりまで行き、その後、整備されたカフェ周辺の道を歩く（約4km）。生田目古墳群付近の道は、生田目里山の会の方々が、郷山カフェひだまりの散策ルートはカフェオーナーの大槻夫婦が、それぞれ自主的に整備している。生田目公民館と郷山カフェひだまりの間には、既存の散策路が整備されているが、それに加え、生田目の散策路と町有林の散策路をつなぐ尾根道の草刈りを行い、今回のルートが通行可能となった。

成果と考察：参加者はまず生田目公民館に集合し、主旨説明やワークショップなどを行った。今回のワークショップでは、散策の道中で参加者が気になったものを「お土産」として採集したり、気になるものを発見した場所とその対象を記録したりする企画を実施した。参加者には生田目公民館で紙を配り、散策中に記入したものを、学生が回収・保管する。参加者と学生のコミュニケーション手段ともなり、会話の途切れない和やかな山歩きで、各々の場所の魅力が顕在化し、共有される機会となった。

○円道寺池周辺の風景観察ツアー、虫の巣箱づくりワークショップ

内 容：円道寺池とその周辺の林道を歩き、風景を楽しみながら樹林の歴史や植生を学び、魅力を発掘し、今後の樹林管理を考える勉強会を開催。また同日学生と中学生を対象とした、虫の巣箱をつくるワークショップを開催した。

講師 景域計画株式会社（東北芸術工科大学・芝浦工業大学非常勤講師）八色宏昌

実 施 日：10月17日（日）

会 場：円道寺池（当日悪天候のため中央公民館に変更）

経 緯：芝浦工業大学小堀研究室による円道寺池を中心とした事前フィールドワークが4月から数回行われ、7月より八色氏がフィールドワークに参加。その後益子花の会と共に事前調査を行い、植生の理解および場所の活用を目的とした林道散策ワークショップを計画。同時に益子花の会の協力の下、芝浦工業大学学生によるバグハウス（虫の巣箱）が制作され、土祭メイン期間に合わせて設置された。また、子供用ワークショップとして、同学生による虫の巣箱作りワークショップが企画された。益子花の会、ワークショップ参加者等との連絡および調整は建設課が担当した。

成果と考察：風景観察ツアーには10名の応募があり、雨天により場所を町民会館に変更して開催。参加者は7名。虫の巣箱ワークショップは8名の参加者があり、全ての参加者が巣箱を完

成することができた。風景観察ツアーの参加者は定員に達しなかったのは、コロナ禍において実施が不透明な点が大きかったのではないか。その為、参加費を 1,000 円と設定していたが、無料に変更した。実施場所の変更については、雨天の場合も予想して準備しており、特に問題はなかった。しかし遠方からの参加者への対処は今後も課題である。益子花の会の方々ともこれからの活動内容について議論する機会となり、今後も幅広い世代と交流を持ちつつ、円道寺池周辺の植生保全と活用につながると思われる。

○旧小宅小学校から安善寺までの風景観察ツアー、テラリウムづくりワークショップ

内 容：旧小宅小学校から安善寺までの道を歩き、美しく続く谷津田、世間遺産である黒石の巨石群などの風景を観察しながら、里地里山の歴史や自然の現状を学び、里地里山の保全を考える勉強会を開催。また同日旧小宅小学校で益子の里山環境やそこで見られる植物についてのレクチャーを実施した。

講師 景域計画株式会社 八色宏昌、地元関係者

実 施 日：10 月 10 日（日）

会 場：旧小宅小学校他

経 緯：小宅地区の風景を観察するワークショップを開催。事前調査として、4 月から八色氏および芝浦工業大学小埜研究室がフィールドワークを行い、地元関係者にインタビュー等を実施した。当日は八色氏による里地里山の植生についての説明、また地元関係者の中山氏、高久氏、小宅氏による歴史の話や安善寺の解説、生物の説明があった。また、小宅氏の事前準備により、魚すくいのイベントが開催された。当日のサポートとして役場職員、小埜氏および芝浦工業大学学生が参加。テラリウムワークショップは芝浦工業大学のご協力で開催された。さらに、床井氏の協力の下、芝浦工業大学学生が旧小宅小学校のアカマツ周辺に柵を制作し、土祭メイン期間に合わせて設置された。

成果と考察：当初、地元協力者および材料費のために参加費を 1,000 円と設定していたが、小学生の参加が多いことも考慮し、参加費を無料とした。またフィールドワークは当初、一般向けとして設定されたが、地区の協力と要望もあり、小学生の参加も受け入れることにした。説明は、一般にも小学生にも理解できる内容であったため、結果的に幅広い世代の参加につながり、今後の地区の風景を考えていく上で、貴重な機会となった。テラリウムワークショップでは、全員が作品を作り終え、写真撮影まで行うことができた。また、ワークショップ後もテラリウムづくりを続けているという報告もあった。

【I】 ツーリズム

《実施の経緯》

2020 年度の「観光戦略会議」において着地型観光商品（コト消費）の開発を推進していく事が決定された。それを受けて益子町地域 DMO である一般社団法人ましこラボに土祭の 1 プロジェクトであるツーリズム部門を委託した。益子町内を周遊するツアーや体験プログラムを通して、土祭に訪れた観光客に「アラワレル、未知の日常」を体感してもらうことを目的として、町内の様々な関係者と連携し、プロ

ジェクトに取り組んだ。

《概要》

○周遊ツアー

内 容：10月23日（日） ①益子の秘蔵文化財見学バスツアー ※中止
11月13日（土） ②益子の味覚満喫バスツアー ※中止
11月13日（土） ③益子の美を感じるポタリングツアー ※中止
11月14日（日） ④アクティブバイク&トレッキングツアーinMashiko

会 場：益子町内

経 緯：コロナ禍による警戒度レベルの変動に伴い、旅行商品として「できる内容」「できない内容」が変動した。感染予防対策等を徹底して実施可能なものとして①益子の秘蔵文化財見学バスツアー②益子の味覚満喫バスツアー③益子の美を感じるポタリングツアー④アクティブバイク&トレッキングツアーinMashiko とバスと自転車で町内を少人数で周遊する4種類の旅行商品を町内旅行業者との連携により造成した。

成果と考察：①～③は参加者が催行人数に届かず中止。原因としては、直前まで緊急事態宣言下で参加者募集が遅れた事、他ツアーの募集が一斉に始まったため競合多く埋没してしまった事が挙げられる。④は定員10名中8名の参加あり。参加者からは「益子の新たな魅力を感じられた」「ツアーサポートの体制がしっかりしていて安心して参加できた」など、満足度調査においても「非常に良い」という回答が多数を占めた。今後の課題として、ツアー募集の工夫と価格設定に見合った内容の磨き上げ等と併せて満足度の高いツアーを継続開催し、リピーターを獲得していく工夫が必要である。

【J】陶芸・手仕事

《実施の経緯》

「土」をひとつのテーマとしている土祭において、「土人形」「光る泥団子」は回を重ねて実施されてきたが、今回、土祭として初めて「陶芸・手仕事部門」を設け、益子焼関係団体振興協議会が中心となり作家主体による企画立案、実施がされた。初回の打合わせは2020年11月に行われ、土祭における企画の方向性として「作家の暮らしの提案」「泥臭くてリアルな益子を見せる」「自給自足の暮らしを考える」「手仕事の魅力・可能性を表現し発信する」等の意見が出され、その結果、以下5つの企画を検討していくこととなった。

《概要》

○つちかまうつわ

内 容：「足元にある土で窯を作り、器を作る。作った器を土窯で焼く」という、土からすべてを作り出せる陶芸の世界を实践していく企画。

実 施 日：7月22日（木・祝）～8月7日（土） 土窯づくりワークショップ

10月2日（土）、3日（日） 器づくりワークショップ

10月1日（金）～3日（日）、11月12日（金）～14（日） 土窯窯焚き見学

会 場：陶芸メッセ・益子 つちかまの丘／陶芸工房、益子焼協同組合

経 緯：土窯づくりを検討していく中での最初の問題が、土窯制作予定地の選定でした。候補として陶芸メッセ・益子（北側山林）を検討する中で、予定地が「御城山遺跡」埋蔵文化財包蔵地であることから、栃木県教育委員会・益子町教育委員会への事前届出を行い、「掘削の禁止」「活用後の原状回復」という条件が付与され使用可となった。この条件により関係者が実施に向けて知恵を出し合い、土窯制作が検討され、地面を掘って作るのではなく、盛土工による土窯制作となった。

成果と考察：土窯制作は、参加作家 25 名延参加人数 118 名により、益子焼協同組合（土練作業場）での粘土づくりと、陶芸メッセ・益子地内での土窯制作が同時進行で進められ、7 月下旬からの 11 日間で完成した。土祭期間中において、土窯で焼成する器づくりワークショップが 2 回、10 月と 11 月に窯焚きが実施され、作家以外の一般参加を募り開催することができた。作業風景は、映像制作され SNS や YouTube を活用してオンライン配信を行った。土窯制作・窯詰め・薪窯焚きの技術を体験し、自己の技術として身につけ成長していくこと、そして後に続く陶芸家たちにその技術を伝承していくことこそ、この土窯プロジェクトの意義であり、それを実践できた機会となった。次年度以降においては、益子焼関係団体振興協議会からの活用計画要望書を受けて、事業継続を予定している。

○オープンアトリエ

内 容：益子の「未知の日常」のひとつ。手仕事を生業とする暮らしを感じてもらう企画。「益子の暮らし・作家の暮らし」をオープンアトリエと題して陶芸作家や手仕事作家などの作業場を訪問し、普段目にすることのない作り手の風景を共有した。サイクリングやバスを利用したツアー形式で実施する。

実 施 日：10 月 16 日（土） KINTA（家具/鉄/オブジェ/絵画/書/陶器）

10 月 23 日（土） 四百窯 近藤康弘（陶芸）

11 月 13 日（土） 博陶房 富野博司（陶芸）

藍染わらたに 藁谷誠（藍染）

経 緯：アトリエ協力者を一般公募し、陶芸作家 4 名・藍染作家 1 名のツアー組立てを進められた。コロナ感染予防対策として、参加者の個人情報管理ができて、アトリエ協力者への安全面も考慮できるという理由で、オープン参加形式ではなく少人数制のパッケージツアーとした。あわせて、アトリエツアーに参加できない方のために映像配信を行うこととした。

成果と考察：作家の暮らしを体験できるアトリエツアーは、普段立ち入ることのできないアトリエ見学と、作家本人から学ぶ作品制作体験のプランで企画され、参加者にとって貴重な時間の共有を図ることができたものとなった。ツアーの交通手段としてサイクリング移動を検討したが、今回のツアーにおいてはツアー運営側の人員不足と、移動距離の長さ、道路状況の悪さが理由で実現ならなかったが、今後においては、サイクリングを活用したツアーの組み立てを検討していけるとよい。

○七つの伝統釉薬で彩る 益子焼陶板アート

内 容：益子焼の七つの伝統釉薬を使った陶板タイルで環境アートを作る企画。新たな観光スポットとして益子駅ポケットパークに西明寺閻魔堂の閻魔大王（笑い閻魔）を描く。

お披露目式：11月3日（水・文化の日）

会 場：益子駅ポケットパーク

経 緯：主催である益子焼関係団体振興協議会と、本企画ディレクター（有）藤原陶房において、益子焼の新たな需要（ニーズ）拡大を図る産地振興支援を目的として、「器」「美術品」以外の可能性を検討し、「建築資材」としての益子焼陶板を使った作品制作の協議が始まった。益子焼陶板で何を表現し、どこに施工するかについては、①益子の伝統釉薬を使い②西明寺の「笑い閻魔」をモチーフにしてデザインし③観光振興を図るという方向で検討を進めた。そのため、施工場所については、観光客が周遊する動線上の数カ所で検討され、益子駅ポケットパークでの施工で進めることとなった。

成果と考察：益子焼陶板制作については、（有）藤原陶房のほか益子焼協同組合6窯元の協力により七つの伝統釉薬を使って仕上げられた。益子焼伝統釉薬のひとつ「並白釉」は全6窯元で焼成を行い、窯元ごとに違う色味を組み合わせデザインすることで、益子焼の個性と魅力を表現した。西明寺「笑い閻魔」のデザインは、見る角度によって表情を変えるカラクリ仕様を取り入れ、来場者が一度で素通りすることなく二度振り返る仕掛けになっている。益子駅ポケットパークの展示室では、七つの伝統釉薬の説明と色見本の展示や、陶板アートが出来るまでの制作工程をパネル展示で説明するなど、益子焼の魅力とあわせてアート（構造物）としての陶板の施工技術を広報していくことで、益子焼産地振興PRを行っている。

○益子原土の土人形

内 容：やきものを作っていく過程で、器などの形を作るときに出てくる「削り土」を集めて「益子の土人形」を作るワークショップを開催する。作られた土人形は、それぞれの家の守り神として飾られる。

実 施 日：7月31日（土）、8月1日（日）、10月17日（日）

会 場：土祭 KENMOKU 広場 土空間ギャラリー

経 緯：第1回土祭2009から実施されている「土人形づくり」。過去においては、子供たちが参加して5000体を超える土人形が作られ町内各所に展示されていた。今期についてはコロナ禍により学校単位での参加要請ができない状況もあり、土人形をメインとした展示は行わず、少人数制の土人形づくりワークショップとして開催し、既存の土人形の一部を会場に展示する方向となった。

成果と考察：土人形づくりワークショップの参加者の年齢層は3歳～大人までと幅広く、参加形態も個人参加から家族・グループ参加が見られた。参加者からは「陶芸体験が初めてでも作業自体が容易で参加しやすい」「ものづくりは自分と向き合ういい機会」など、それぞれの多様な楽しみ方ができるワークショップとなった。

○藍色の光る泥団子をつくろう

内 容：焼き物の里である益子の土を用いて、泥団子を作り光らせていくワークショップ。

実 施 日：10月3日（日） 土祭 KENMOKU 広場 土空間ギャラリー ※中止

10月24日（月） 陶芸メッセ・益子 陶芸工房

10月31日（日） 日下田藍染工房

経 緯：土祭 2015 で開催された「光る泥団子講師養成講座」に参加したメンバーが中心となり 2016 年に発足した「益子☆光る泥団子 team ツチカラ」にワークショップ開催を依頼。今期のワークショップ開催にあたり、日下田藍染工房から譲り受けた「沈殿藍」を使用した「藍色の光る泥団子」の提案があり実施されることとなった。

成果と考察：藍の光る泥団子づくりワークショップを 3 回予定し、1 回目については主催者都合により当日での開催中止となった。その後の開催については問題なく開催することができた。参加者からは、藍色に光る泥団子の美しさと、年齢に関係なく参加できる楽しさなど、満足度アンケートでも好評な結果をいただいている。藍の光る泥団子づくりワークショップと、陶芸メッセ・益子企画展「藍より青く」（日下田正展）開催期間が重なり、互いの会場からの誘導・広報による相乗効果も見られた。

【K】関連企画

○陶芸メッセ・益子企画展 益子人—高橋恭司が撮る益子に暮らす 500 人の肖像—

内 容：益子町出身の写真家 高橋恭司が益子に暮らす人の写真を撮影し、土祭期間中に陶芸メッセ・益子敷地内の旧濱田邸に展示。

実 施 日：9月17日（金）～11月14日（日）

会 場：益子陶芸美術館／陶芸メッセ・益子 第3展示室・旧濱田庄司邸宅

経 緯：土祭 2021 関連企画として、益子町出身で東京に拠点を置き、国際的に高い評価を得ている写真家 高橋氏が 2020 年秋から一年をかけ、町内の 0 歳から 98 歳までの 500 人の今の顔を撮り下ろし、展示した。店の軒先、畑、環境ボランティアの草刈りの後の池や丘、陶芸家の工房などさまざまな場所で撮影した。

成果と考察：展示会場では、知り合いの写真を見つけて楽しむ人や表情からその瞬間を思い描く人などが見られた。益子らしさや、益子に暮らす人のふるさとへの愛情を見直すきっかけになったと思われる。

○アレッシア・ローロ写真展「European Eyes Japan/Japan Today」

内 容：アレッシア・ローロが益子町で撮影した写真を展示。また秋田公立美術大学の石倉敏明とのオンライントークセッションを行った。

実 施 日：5月22日（土）から 6月6日（日）

会 場：ヒジノワ cafe&space

経 緯：ローロ氏は日本と欧州文化首都との写真プロジェクト「European Eyes on Japan/Japan Today」の選抜作家として、平成 31 年 2 月に益子に滞在し、多くの益子の人と交流しながら

ら写真作品の制作を行った。その成果は、欧州文化首都の開催地イタリアで公開され、今回は撮影地でもある益子町でお披露目することになった。写真展の初日に芸術人類学の石倉氏を迎えてトークセッションを行う予定であったが、感染症の拡大を受けて、オンラインで繋ぐこととなった。

成果と考察：写真展では、町内で撮影した 11 点を含む計 12 点を展示。粘土の採掘場で埴輪をそばに寝転ぶ人や火の入った登り窯を収めた作品のほか、職人の手や自然に焦点を当てた作品などが並んだ。写真展、トークセッションによって、益子について考えるきっかけになったという意見があった。当初、すべてのオンラインのトークセッションを Youtube にて公開予定だったが、ネットの状況が悪く録画することができなかった。そのため石倉先生のトークセッションのみを公開した。視聴回数は 282 回（2021 年 2 月 18 日現在）オンラインでのセッションは事前にネット環境や配信について練習が必要。

○日本国際理解教育学会・地域論プロジェクトによる公開研究会

風土に根ざす地域づくり・学びづくり 益子町「土祭」と「ヒジノワ」に学ぶ

内 容：持続可能な地域づくりの在り方を、文化や学び、観光などの側面から、益子を調査地として研究を続けてきた研究者を招いて地域住民とともに、学び合う機会を設ける企画。

講師は、東日本国際大学 南雲勇多、早稲田大学 山西優二、東京大学空間情報科学研究センター 廣瀬俊介、協働研究者 高山源樹。

実 施 日：10 月 31 日（日）

会 場：ヒジノワ cafe & space

経 緯：日本国際理解教育学会の特定課題研究の 1 つで、地域の文化活動における、地域づくりの持続可能性を探る取り組み。その対象として土祭・ヒジノワが認定され、平成 31 年から調査・研究がスタートした。土祭には毎回参加し、毎年 12 月に町内の民宿でゼミ合宿を行う、早稲田大学文化構想学部・山西優二ゼミと、東日本国際大の南雲氏を中心となり調査を進めた。

成果と考察：はじめに東京大学空間情報科学研究センターの廣瀬氏、早稲田大学の山西氏、東日本国際大学の南雲氏の間接報告があり、その後、関係者とのトークセッションを行った。トークセッションでは、「ヒジノワのようなコミュニティもまだない地域で、どのように場づくりしていけばよいか？」、「益子での農業のあり方は？」なども質問があった。地域の問題解決について考えるきっかけとなったと思われる。

○風景社セッション 2021「その先の、風景を語ろう。」

内 容：地域社会の在り方と、「私」や「あなた」の生き方を、どう重ねるか？その手がかりを探るトークセッションを開催した。講師はソトコト編集長 指出一正、アーティスト・切腹ピストルズ総隊長 飯田団紅、ミュージシャン・般社団法人リバーバンク代表理事 坂口修一郎、千葉大学大学院生・在日記者 蔡奕屏、農耕者「つち式」代表 東千茅、私の森.JP 編集長・一般財団法人ハヤチネンダ理事 赤池円。

実 施 日：7月10日（土） 第1回「持続可能な地域づくりーローカルから据え直す SDGs」
8月7日（土） 第2回「反近代をどり」考証
9月4日（土） 第3回「文化の地産地消を目指してー廃校から見えてくる未来の風景」
10月2日（土） 第4回「日本と台湾ー地方創生とローカルデザイン」
11月13日（土） 第5回「二百年の里山、十全に生きるために」
12月14日（土） 第6回「森からめぐらす、いのちのランドスケープ」

会 場：ヒジノワ cafe & space

経 緯：益子町を拠点に活動する有限責任事業組合風景社の自主企画として、7月から12月まで月1回、全6回にわたってセミナーを開催した。開催方式は、感染症防止の観点からハイブリッド方式（①オンデマンド視聴②収録会場での参加）とした。

成果と考察：オンデマンドで配信したこともあり、東北地方や関西地方をはじめ広域的なエリアからの視聴者がいた。（海外も1名あり）。参加者からの感想としては、「関係人口を作るって、心の距離を縮めていくことなんだなと実感できました。」や「大事な学びをありがとうございます。」などがあった。持続的な地域づくり、地域の活性化、自然との共生、コミュニティの再生などの手がかりを探る学びの場となったと思われる。

○無印良品×益子町連携企画「もののゆくえ」

内 容：誰かの不要なものが、見方を変えると必要なものになったり、永く使い続けられる工夫や知恵を出し合うことで、もののゆくえは変わっていく。これからの暮らしを考える企画。

実 施 日：10月23日（土）、24日（日）、11月6日（土）、7日（日）、13日（土）、14日（日）
つながる市

10月23日（土）、24日（日）、11月6日（土）、7日（日）

くるくる回そうリサイクル ～カードゲームで、遊ぼう～

10月24日（日）～11月13日（土）もののゆくえ企画展示

10月31日（日）、11月13日（土）金継ぎワークショップ

会 場：土祭 KENMOKU 広場、道の駅ましこ

経 緯：2021年10月に益子町と(株)良品計画が地域包括連携協定を交し、この協定に基づく取組みの第1弾として、土祭における「循環型の地域づくりを实践する機会をどう提案できるか」について検討された。その中で、ごみを減らす資源循環型の暮らし方について考え、体験するワークショップやパネル展示を実施する意向が固まり、会場選定や企画内容についての打合せを進めた。

10月6日に発行された主催者制作の広報用チラシにおいて、企画展示「もののゆくえ」の会場案内が、すでに土祭アーカイブ展示で使用している同会場が掲載されたことにより、土祭来場者やアーカイブ展示関係者に対して混乱させてしまうこととなった。その後、HP等で正確な情報の周知を行った。広報として正確な情報を発信してくよう改善を行った。

成果と考察：陶器のアップサイクルを实践する「金継ぎワークショップ」は、陶芸メッセ・益子 国際工芸交流事業担当 阿部氏が講師を務め開催され、事前予約で定員を上回る申し込みがあっ

た。陶器の産地である益子町だからこそ、陶器の産業廃棄物問題に率先して取り組まなくてはならない課題であることを発信し、実践することができた。くるくる回そうリサイクルワークショップにおいては、参加者へのアンケート調査を行い「ごみの細分化について」回答数 319 人のうちの 76%が「リサイクルにつながるなら細分化してもいい」と回答しており、リサイクルへの関心度の高さをうかがうことができた。

○「営みと暮らしの共有を通じたまちづくり／まちのデザイン」

内 容：「商店街の町並みをどう残していくか」「未利用資源（空地・空き店舗）の見直し、活用」等について、地域の方と共に実地調査やヒアリング、ワークショップを行う。町の空間的リソースと、そこでの営みと暮らしのイメージを拾い出し、そこから、豊かで持続的なまちの将来像を共有して描いていくための道筋を見出していくことを目的としている。メイン期間において、研究内容の展示・発表を予定し、まちづくりの次のステップを考察するための機会としていく。※益子町、益子町商工会との共同研究企画として実施。監修として宇都宮大学地域デザイン科学部遠藤康一研究室。

実 施 日：10月16日（土） 益子本通り商店街まちあるきヒアリング

11月5日（金）～11月14日（日）展示「これからの益子町をかんがえる」

経 緯：2021年5月に益子町と宇都宮大学が「営みと暮らしの共有を通じたまちづくり／まちのデザイン」～益子本通り界隈の活性化への取組み～」に関する共同研究契約を交わしたことをきっかけに、土祭の志にもある「ひとつひとつの魅力ある地域を創る」に沿った研究企画の検討を行った。その中で、益子町商工会との益子本通り研究企画、宇都宮大学学生研究展示発表（城内坂地区）の2企画が計画された。益子本通りまちあるきヒアリングについては、コロナ感染予防対策として当初の日程からの1か月程延期し、町内関係者も協力しやすい時期を待って実施することとなった。

成果と考察：益子本通り商店街まちあるき研究企画については、益子町商工会・自治会長・地元協力者等と、宇都宮大学学生14名・先生2名が4班に分かれ、新町・田町・内町地区の商店街の現状の声や、空き家・空地の現状調査、成果発表を行った。今回の研究成果については、本通り商店街のまちづくり・町並み形成を検討していくうえでの貴重な資料として活用し、調査研究は今後も継続される。展示「これからの益子町をかんがえる」の会場において、既存の土祭企画「ウィンドウアート」作品展示がされている会場内部を借用し行った。その借用条件として「ウィンドウアートが描かれているガラス戸は作品が見えるように常に閉めておくこと」としていたが、展示期間中において来場者の出入口としてガラス戸が開いたままの状態となることが多々見られたため、事務局から企画主催者に注意喚起を行い改善の対応を行った。

【L】その他

○土祭 2021 オープニング

内 容：土祭 2021 の「安全祈願」を行った。

実 施 日：5 月 22 日（土）

会 場：鹿島神社

参 加 者：17 名

経 緯：計画当初のオープニング会場は、春だからこそその益子の美しい水田風景の中で行えないかと検討し、道の駅ましこ北側の水田での神事「安全祈願祭」を行う方向だった。準備を進めていく中でコロナ禍が進み、感染予防対策として最少人数（土祭実行委員会関係者のみ）による神事を鹿島神社本堂で行った。

成果と考察：神事は、土祭実行委員会関係者 17 名が参会し滞りなく行われた。

○土祭 2021 クロージング 土音楽祭

内 容：土祭 2021 の締めくくりを祝う音楽祭を開催。

出演者 林英哲（和太鼓）、英哲風雲の会（和太鼓）、益子天人疾風の会（和太鼓）。

実 施 日：11 月 14 日（日）

会 場：土祭広場 土舞台

参 加 者：391 名

経 緯：過去の土祭クロージング企画においては土音楽祭会場で夕焼けバーが開かれていたが、コロナ禍により、飲食をともなう夕焼けバーは開催しない方針が実行委員会で決定された。これにより、クロージング企画は土音楽祭のみを開催するとして出演者の検討を行った。出演候補者を 3 組と想定し、それぞれに出演者のスケジュールと予算の確認を行った上で実行委員会に提案し、検討の結果、益子大使でもある林氏（英哲風雲の会、益子天人疾風の会）への出演が決定した。出演候補者 3 組の内の 1 組と事前のスケジュール確認を行った際に、先方がそれを出演決定と受けとられたことによりご迷惑をかけてしまった。出演候補者との連絡は電話で行っていたため、当事者間で認識の相違を確認することが出来なかった。特に今回のような契約に関わる連絡調整については、文書をもって対応するよう改善した。

成果と考察：林氏による益子天人疾風の会への技術指導や和太鼓文化の振興に貢献されてきたことを町民の方に知っていただく機会にもなった。来場者からは、「和太鼓の緊張感が気持ちよい」「土祭ならではの土舞台演奏会は毎回楽しみにしている」などの感想をいただいた。来場数は事前申込 200 席、当日入場 100 立席で募集を行い、事前申込数は定員満席となり当日入場も予定数を超える入込となった。コロナ感染予防対策として席間隔の確保を促したが、一部の立席エリアにおいて密になる場面があり、会場管理においては一部問題が残った。

○土祭ストア

内 容：土祭期間中において、土祭オリジナルグッズの他、町内の手仕事品を販売する拠点として「土祭ストア」を開設。

実 施 日：6月2日（水）～11月14日（日）

会 場：土祭 KENMOKU 広場

経 緯：土祭 2021 公式コレクションファイル、土祭オリジナルグッズ、土祭アーカイブ本、益子町の手仕事品の販売を行う「土祭ストア」を開設。土祭ストアは、総合受付のある土祭 KENMOKU 広場の他、道の駅ましこ・観光協会（公式コレクションファイルのみの取り扱い）の3カ所に設置することとした。土祭オリジナルグッズと手仕事品の販売管理をましこカンパニーに委託し、事業性のある運営体制をとった。オリジナルグッズのロゴデザインについては、町内作家による切り絵で「土」をデザインされたものを採用し、土祭において益子の手仕事の魅力を発信するひとつの機会とした。

成果と考察：土祭 2021 公式コレクションファイルについて、町内者は無償配布・町外者は 500 円で販売とした。機能として、ヒジサイ NOTE をはじめとした土祭広報物をコレクションする他、アート展示会場の入場パスポート機能を持たせたことにより売上効果に繋がったと考える。その反面、販売する際のアナウンスが難しかった面があった。土祭ストアの入出金管理は Square(スクエア)のポスレジを採用し、日計・月計の他、商品ごとの売り上げ集計等を一括管理できるため、会計処理をスムーズに行うことが出来た。

○土祭アーカイブ

内 容：これまでの土祭について、写真や過去の土祭でつくられた作品を用いて展覧する企画。

実 施 日：7月2日（金）～11月14日（日）

会 場：土祭 KENMOKU 広場内 土空間ギャラリー

経 緯：窯業と農業だけでなく、あらゆる生命の源である「土」に対する感謝の念を大切に、新たな文化を興すことでこの土地の風土を健やかに育み、次世代に手渡していく祭りである「土祭」の過去の様子を伝えるため、アーカイブ展示を開催する。

成果と考察：より過去の様子を具体的に伝えるため、写真を中心とした展示プランとした。土祭 2012 総合プロデューサー馬場氏が残した文章や、土祭の様子を初回から撮影してこられた村田氏の写真を展示した。加えて、過去の土祭ポスター、土人形、光る泥団子、土祭 2015「風土・風景を読み解くプロジェクト」で制作された廣瀬氏による益子の風土風景スケッチの複製画を展示した。土祭 2015「風土・風景を読み解くプロジェクト」の複製画については、当初の予定にはなかった良品計画による同会場での展示開催を受け、著作権者より使用取り消し申請がなされたため、これを受理し、10月22日までの展示となった。回を重ねるごとに試行錯誤し、さまざまな取り組みをしてきた土祭について振り返る機会の創出に寄与できたと考える。

○土祭スタンプラリー

内 容：アート作品や世間遺産などを巡るスタンプラリーを作成する。公式コレクションファイルの特典としてスタンプラリー台紙とマップを付けて販売するほか、町内の方には土祭窓口で無料配布する。スタンプラリーポイントのスタンプの数に応じて町内共通ポイントカード「mashipo」や、土祭オリジナルグッズを進呈する。

実 施 日：5月22日（土）～11月14日（日） 世間遺産編 40カ所
10月15日（金）～11月14日（日） アートを巡る編 9カ所

会 場：町内各所

経 緯：コロナ禍において、人が密にならず安心安全に土祭を楽しんでもらえる企画として、ましこ世間遺産・アート展示会場を巡るスタンプラリーを計画した。ましこ世間遺産 57カ所中の有形遺産 40カ所選定し、現地確認を行った上でマップを作成し、スタンプラリー看板とスタンプ・スタンプ台・消毒液を設置した。世間遺産周辺には駐車場がない場所が多いため、マップには駐車場有無のアナウンスと、自転車周遊の推奨を行った。アートを巡る編については展示受付小屋にスタンプを設置し、公式コレクションファイル販売の際にスタンプラリーの案内を行えるような仕掛けとした。

成果と考察：ましこ世間遺産編においては、道に迷う方やたどり着けない方が多くみられたため、ポイントまでのルート上に矢印看板を立てるなどの対応を行った。期間中は、事務局が定期的に巡回し、雨対策や蜂対策を行いながら管理を行っていたが、参加者から「スタンプが無くなっていた」「看板が取れそう」等の連絡をいただく機会があり、一部管理が行き届いておらず、管理上の問題となった。スタンプラリー参加者からは「スタンプラリーをきっかけとして益子の里山や田園の中を歩いて、素敵な場所をたくさん発見することができた」という満足度の高い感想をいただいている。全 40カ所を巡った人数は 41名だった。

○ヒジサイ図書室

内 容：益子町在住の絵本作家「いわむらかずお」をはじめとした、100冊以上の絵本を並べ図書室とした。図書室内には、図書ボランティア、読み聞かせの会などの活動団体をパネルで紹介した。

実 施 日：7月2日（金）～11月14日（日）

会 場：土祭 KENMOKU 広場内、小屋 gallery

経 緯：土祭総合受付会場「土祭 KENMOKU 広場」内に、来場者の待ち合わせや、ゆっくり時間を過ごすことができる場所をつくりたいと考え、敷地内の小屋ギャラリーに「ヒジサイ図書室」を設えた。ヒジサイ図書室の図書は絵本を中心に対象年齢を 3歳～12歳と想定して、いわむらかずお絵本の丘美術館より 115冊、益子町図書室から約 150冊を借用した。ヒジサイ図書室内には、町内で活動している読み聞かせボランティアの紹介パネルを設置し、会期中に絵本の「読み聞かせ会」を計画した。

成果と考察：コロナ禍を考慮し屋外にベンチを設置したが、盛夏・梅雨・秋寒の時期においては屋外ベンチの利用者はほとんど見られなかった。ヒジサイ図書室の来場者割合としては親子連れ

が多くみられた印象だったが、大人のみの来場もあり懐かしく絵本を読んでもらうことができた機会となった。会期中に計画していた「読み聞かせ会」はコロナ禍により中止とした。

○動画配信・3D view

内 容：コロナ禍による不要不急の移動制限により土祭への来場ができない方や、アフターコロナに向けてのプロモーションとして、土祭プロジェクトの準備風景から開催内容を動画撮影し、定期的に動画配信を行う。またアート展示や世間遺産を3D viewでの公開を検討し、撮影した映像は益子町のプロモーション用の資料として会期後も活用していく。

実 施 日：5月28日（金）～

経 緯：動画の制作・配信は事務局主体で行うにあたり、会期中のイベントスケジュールを確認し動画制作の計画を立てた。会期前半については企画数が少ないため、益子の風景（田植えや里山風景）やプロジェクト紹介の動画を作成し配信を行った。会期後期については、イベントが重なることも多く、動画制作が、部門により偏りが生じてしまうことになってしまった。アート展示や世間遺産の3D View配信については、人員確保の問題と制作技術的に難しかったこともあり実施できなかった。

成果と考察：YouTubeでの動画配信とInstagramでのライブ配信等を行った。YouTubeは計32本、Instagramではリール（短編動画）とライブ配信併せて計36本の動画の配信を行った。YouTubeではチャンネル登録者数0から始まり、会期後には42人まで登録者数を延ばすことができた。土祭レポーターの仁平氏、陶芸手仕事部門広報担当の栗谷氏が撮影した映像もあわせて配信を行った。映像制作は事務局主体で行ったが、完成度（動画の統一感、イメージの発信力）の面で、動画制作においては専門的技術をもった人材が行った方がよいと感じた。3D Viewは行うことができなかった。

4.広報・メディア制作における報告

4-1 実施概要

《実施の経緯と概要》

○リリース・パブリシティ活動

3月：土祭 2021 ウェブサイトを開設、SNS(Facebook、Instagram)を再開

J R東日本へポスターを発送

4月：ポスター・DM・ヒジサイノート NOTE.1 を町内外施設店舗へ送付・配布（町外 143 件 町内 121 件）

広報ましこ 4月号にて土祭 2021 の開催概要を掲載

ポスターを再送付・配布（会期変更のため）

5月：広報ましこ 5月号にて土祭 2021 開催におけるコロナウィルスガイドラインを掲載

5月版リリースメール送付（県内メディア 11 社）

7月：ヒジサイノート NOTE.2 を町内外施設店舗へ送付・配布（町外 146 件 町内 148 件）

7月版リリースメール送付（県内メディア 12 社）

8月：ヒジサイノート NOTE.3 を町内外施設店舗へ送付（町外 149 件 町内 148 件）

9月：ヒジサイノート NOTE.4 を町内外施設店舗へ送付（町外 148 件 町内 150 件）

9月版プレスリリース・プレスツアー招待状送付（都内メディア 32 社 県内メディア 13 社）

9月版リリースメール送付（教育機関 12 件、県内メディア 12 社）

10月：ヒジサイノート NOTE.5 を町内外施設店舗へ送付（町外 148 件 町内 150 件）

トップセールス（郵送 23 件、訪問 12 件）

メディアツアー開催（参加新聞社 5 社）

広報ましこ 10月号にてアート展示記事を掲載

11月：PR TIMES にてリリース送付（11月15日時点 ページビュー920 訪問者数919 転載サイト28件）

土祭メイン期間開催イベント告知フライヤー新聞折込（5500 枚）

広報ましこ 11月号にてメイン期間に開催中のイベントについて掲載

4月～11月：広報回覧（全13回発行）

10月15日～11月14日：県内メディア（10 社）へ週末開催イベント情報リリース（全3回）

10月14日～11月14日の木、金、土曜：防災無線で土祭開催の告知

○ポスター | 配布部数 1197 枚 ※再送含む

馬場真海氏撮影写真を用いたポスターを作成。3月にJ R東日本向けにB 1ポスターを190部送付、その後B2ポスター500部、A2ポスター1000部、フライヤー（DM）3種類×3000部を発行し、4月上旬に町内外施設店舗へ送付した。その後会期が変更となったため、日付を訂正したB2ポスター300部、A2ポスター500部を発行し、再発送した。

○フライヤー | 配布部数 9,542

メイン期間中のイベント一覧として作成した。1種類、「A3 見開き」。町内に新聞折込みで配布。（5,500

枚)そのほか各会場にて配布した。

○公式ウェブサイト

3月15日よりページタイトルを「土祭 2018」から「土祭 2021」にリニューアルし、ウェブサイトを公開した。

今回は土祭 2021 公式レポーターを設け、各部門のプロジェクトについての記事をレポートし、ヒジサイブログとして掲載した。なお、プログラム詳細やヒジサイブログの更新作業は、事務局が担った。

6月17日～11月14日のアクセス解析による訪問者数は 22,429 人、ページビューは 100,093 件。(6月16日までアクセス解析ができていなかったため)

メイン期間(10月15日～11月14日)の訪問者数は 9,998 人、ページビューは 43,811 件。

2015 年、2012 年と比較するため 107 日間(7月31日～11月14日)の訪問者数は 18,573 人、ページビューは 83,465 件。

<参考>

2018 訪問者数 11,952 人、ページビュー数 83,799 件(9月15日～10月7日)

2015 訪問者数 60,572 人 ページビュー数 220,355 件(6月15日～9月30日)

2012 訪問者数 57,148 人 ページビュー数 321,112 件(6月15日～9月30日)

○公式 SNS (Facebook、Twitter、Instagram)

・Facebook

土祭 2018 で使用していたアカウントを継続使用。プロジェクトの進行状況や、参加者申込み、作家紹介などを投稿した。投稿数 190 件。

ページ読者(いいね!の数)は、4303 人、フォロワー4318 人。

<参考>フォロワー数

土祭 2018 4,304 人

土祭 2015 4,001 人

土祭 2012 1,789 人

・Twitter

前回に引き続き、発信無し。フォロワー927 人

<参考>フォロワー数

土祭 2018 1,021 人

土祭 2015 1,053 人

土祭 2012 データなし

・Instagram

前回の土祭アカウントを引き続き使用。土祭 2021 終了時点でフォロワー数 721 人。投稿数 225 件。土祭 2021 のハッシュタグで投稿を促した。ハッシュタグでの投稿数 513 件。

<参考>フォロワー数

土祭 2018 323 人

土祭 2015 データなし

土祭 2012 データなし

・YouTube

今年から、土祭プロジェクトの準備風景や企画の内容を動画撮影し発信を行った。

事務局で制作した動画のほか、レポーターや陶芸・手仕事部門による動画を掲載した。

動画本数 25 本 チャンネル登録者数 41 人

○公式コレクションファイル

A5 左あき 3,000 部 500 円（税込み）5/22 発売開始

（ウェブストアでは送料分を考慮して 640 円で販売）

※公式コレクションファイルがアート会場の入場パスポートとなる。

・販売方法については「2-4 公式コレクションファイル販売と配布実績」を参照。

・内容について

A5 ファイルにヒジサイノートや説明資料を収納できるファイル。購入時の特典としてポストカード 3 枚、スタンプラリー台紙付き

《成果と考察》

○フライヤー

土祭イベント情報はヒジサイノートの最後に月ごとのイベント一覧を掲載していたが、町内を対象として広く周知する必要があると考え、フライヤーを作成し、町内に新聞折込み（情報の集約の都合で月 1 回の全戸配布には間に合わなかった）で配布した。配布後は、町民からのイベント参加申し込みの電話が増加した。

○公式ウェブサイト

土祭レポーターによって公式ウェブサイト内の「ヒジサイブログ」でプロジェクトの様子を逐一知らせることができたことで、会期前・会期中における発信力の強化につながった。

今回はコロナ禍での開催であったことから、感染症対策ガイドラインを示すトップバナーを開設した。アンケートでは、「ホームページがわかりにくい」という意見が複数寄せられ、「過去の情報と混在していてわかりづらい」という意見もあがった。上記の意見があがった原因としては、次のことが挙げられるだろう。

まず、5 月当初は詳細が決まらない企画が多く、ホームページに詳細情報を掲載できない時期が続いた。一方、会期後半になると、掲載されているイベント数が多く、欲しいイベント情報をうまく抽出できない状況となってしまった。

「わかりにくさ」を改善するためには、トップページに、今回開催するイベントや部門 を写真やイラストなどとともに表示し、一目でイベントの全体像が見える構成がよいのではないだろうか。また、今回は Web 管理が事務局となったため、ページの修正に時間がかかってしまった。

○公式 SNS (Facebook、Twitter、Instagram)

フォロワー数は前回と比べ、Facebook は 14 名の増加、Twitter は 94 名の減少、Instagram は 398 名の増加となった。今回の土祭では、10 代～20 代の利用率が多い Instagram に重点をおいて発信を行ったことがフォロワー数の増加につながったと思われる。Facebook についてはフォロワーが前回からほと

んど伸びておらず、新規層の獲得には至らなかった。SNS のフォロワー数については、その時点での各種 SNS の利用者動向（アクティブユーザー数や年代ごとの利用率など）に大きく影響を受けるため、どの SNS で発信することが効果的か、という視点で媒体を選択することが重要だと思われる。

○公式コレクションファイル

[2-2 公式コレクションファイル販売と配布実績] を参照。

○ヒジサイノート（ガイドブック）

アート部門の作家をはじめ、各部門の参加者の方に取材した内容で、「センスが良い」との評価も受けた。長期間にわたるイベントであったからこそ、無理に一つにまとめるのではなく、月ごとに分けて発行したことが情報を充実させるに至ったと考えられる。毎号様々なテーマ・視点から土祭について取り上げていたが、「最新の情報がどれか分からない」という声もあった。コロナの状況で情報が錯綜していたため、最新がどれかということを知りやすくする必要がある。

○YouTube

今回新たにアカウントを開設し、動画制作および配信を行った。イントロは益子の風景をドローンで撮影した映像を外注し、その他の部分は事務局で制作した。

Instagram や Facebook 上で直接短い動画をアップした際は、その記事の閲覧回数が増えるが、YouTube はそのほかの SNS にリンクを掲載し広報してもなお、再生回数がのびなかった。より手間のかかる YouTube の方が成果を上げられないという結果に終わってしまったため、今後の運用には検討が必要である。

○地図について

イベント数が多く、また会期当初にすべての会場が確定していなかったため、今回は紙資料としての地図を作成せず、ホームページ上でイベントごとに会場の場所を知らせた。しかしながら、わかりにくい場所にある会場が多々あり、提示の仕方も不明瞭で不十分であった。さらにホームページの掲載のみとしたため、ネットを利用できる方に限定されてしまった。アンケートに「情報発信の仕方やわかりやすいマップが必要」の意見があり、またメイン期間には、会場の場所がわからないという声を多数受けたため、会場住所を表記したチラシを配布するなど対応したが、解決には至らなかった。以上より、地図はホームページのみならず、紙資料としても詳細なものを作成すべきである。いかに見やすい地図を作成するかが、各イベントへの参加意欲を喚起するひとつのポイントとなるのではないかと考察する。

4-2 広報活動やメディア制作での成果

掲載されたメディアの報告

《新聞》

- ①下野新聞 5/12 「益子・22 日から恒例『土祭』 催し半分に分散、蜜回避」
- 5/24 「益子・『土祭』開幕 放棄地を牧草地に」 牧場づくりプロジェクト紹介
- 6/3 「伊写真家が写した益子」 アレッシア・ローロ写真展紹介
- 6/7 「菜の花名所で種取り」 小宅古墳群菜種収穫の様子紹介

7/26 「園児のアート窓彩る」ウィンドウアートプロジェクト紹介
7/29 「粘土使い伝統の『土窯』」
9/20 「青空に映えるヒガンバナ」小宅古墳群のヒガンバナと里山プロジェクトの紹介
10/17「土祭メイン期間アート展開幕『未知ノ日常』現る!？」アート展示紹介 KINTA さん作品
写真掲載

10/20「食、手仕事、文化の『秋』」土祭イベント概要紹介
11/4 「益子駅前に『笑い閻魔』」
11/8 「町民に花火で楽しみを」
11/12「道の駅ましこにヤギ集合」
11/16「和太鼓演奏などで閉幕」

②真岡新聞 6/18 「貴い汗で『未知の日常』を可視化」小宅古墳群菜種収穫の様子紹介
10/15「未来を展望するパネル設置」里山プロジェクトの紹介
10/29「益子に暮らす 500 人の肖像」陶芸メッセ企画写真展の紹介

③読売新聞 10/13「益子の風土感じる催し」

④朝日新聞 5/24 「芸術通し新たな日常再構築 益子で 5 回目の『土祭』開幕」
9/27 「『益子の秋』絵画で窓彩る」ウィンドウアートプロジェクト紹介
10/17「町と自然とアート一体に」アート展示紹介、KINTA さん作品写真掲載

⑤産経新聞 10/9 「『土祭』15 日からメイン期間

⑥よみうりタイムス 10/15『土祭（ヒジサイ）2021 アラワレル、未知ノ日常。』

⑦日経新聞 6/1「栃木・益子町の『土祭』開幕 長期開催『コト消費』に的」
10/27「多彩なアート町中に点在」

《ウェブマガジン》

- ①今日の建築・都市・まちづくり「まち座」 6/25「風景社セッション2021」第1回
- ②ライフジャーナルマガジン雛形 7/30「『どう生きたいか?』という問いから、地域のありようを考える。
トークセッション『風景社セッション 2021 その先の、風景を語ろう。』会場参加&オンラインにて開催
中!」
- ③The Fashion Post 9/1「高橋恭司が出身地の益子で写真展『益子人 -高橋恭司が撮る益子に暮らす 500
人の肖像-』を開催」
- ④yahoo ニュース配信 9/8
- ⑤BRUTUS 9/17「再び故郷・益子に向き合うとき、写真家・高橋恭司は何を思ったのか」
- ⑥open online 掲載『高橋恭司の写真展「益子人」が開催! テーマは益子に暮らす 500 人』
- ⑦美術手帖 12/15『今現在の「日常」とは何か。小金沢智評「土祭 2021 アラワレル、未知ノ日常。』

《情報誌》

- ①タウン情報もんみや 10 月号
- ②情報誌「地域づくり」10 月号
- ③「TANOKURA」vol.33
- ④月刊誌「旅の手帖」11 月号

《成果と考察》

県外からの集客を行うため、10月に東京のウェブマガジンを出している雑誌社を含めた県内外メディア（都内メディア32社 県内メディア13社）にリリースやプレスツアー開催の通知を出したが、掲載実績は県内情報誌3件、県外情報誌1件であった。風景社が陶芸メッセ・益子からの委託でリリースを作成しPRを行った「益子人」はウェブマガジン3件で掲載され、yahooニュースで配信された。風景社の自主企画「風景社セッション2021」は、2社のウェブマガジンで掲載された。リリースを送付する際、アート系の雑誌社にはアート部門のリリースを追加で添付し、1社掲載された。

土祭の企画内容は多岐にわたっており、企画数が多いことから、事務局が各企画一つ一つを丁寧に、それぞれの分野を取り扱うメディアに対して広報を行うことは、非常に難しいと感じた。メディア向けの広報については、専門業者の活用が有効な手段となるのではないかとと思われる。

5.準備・運営・サービスにおける報告

5-1 会場選定

《経緯と概要》

○地域づくり

田野地区、七井地区においては、地区委員の多くが土祭 2018 から参画しており、当時会場となっていた「道の駅ましこ」、「小宅古墳群」を今回も継続して活用していくこととなった。益子地区については今回初参加の委員が多く、さまざまな種類の企画アイデアが出た結果、「小貝川親水公園」や「春日神社」など今までにない会場が候補地に挙がった。

○住民プロジェクト

基本的に会場となったのは、住民プロジェクトに応募があった企画運営者が所有する店舗や施設が多かった。町内に拠点を持たない方でも参加できるよう土祭広場やましこラボを会場として使えるよう案内した。

○アート

感染症予防の観点から屋外展示を前提として会場の選定を行った。今回新たにアート展示会場として活用したのでは、亀岡八幡宮、御霊神社、益子向原の杉林、星宮神社、八幡神社（長堤）の5カ所である。神社については地域の方と相談の上、利便性・周遊性を鑑み決定した。また益子向原の杉林は、2020年9月に実施した踏査によって決定した。そのとき他に候補地となったのは、益子の商店街にある茅葺屋根の民家、益子駅石倉、大郷戸ダム、前沢町有林である。

○空間会場づくり

「土祭」の文字を書くワークショップは、集まりやすさと、スペースの広さを考慮し、町民センターで行うこととした。中止となったのぼり旗竿づくりワークショップは、道の駅ましこ東側の竹林をお借りして実施する予定だった。

○住民参加の広報プロジェクト

ウィンドウアートプロジェクトは、大きな窓ガラスがあり、人通りが多い町内店舗や施設という条件で会場を選定した。

○日本遺産かさましこセミナー

日本遺産かさましこセミナーは、つかもと迎賓館で実施した。つかもと迎賓館は、茂木町から移築した庄屋造りの建築で、土祭 2012 の際にもセミナーを実施していることから選定した。文化財特別公開は、日本遺産かさましこの構成文化財を所蔵する寺院などが会場となった。

○食育・食文化

小麦プロジェクトは耕作放棄地となっている場所道の駅ましこ横圃場、塙圃場でとれた小麦を使用し、地ビールプロジェクトは東田井地区の圃場でとれた大麦を使用した。ましこ野菜と合鴨農法のお米は、町内で農薬を使わない野菜やお米の生産者の農地でとれたものを使用した。牧場づくりは森林ノ牧場予定地をメイン会場とした。

○ランドスケープ

平成 30 年度より進められている益子町ランドスケープ計画に基づき、七井地区の「旧小宅小学校周辺」、益子地区の「円道寺池周辺」、田野地区の「前沢町有林」を会場とした。

○ツーリズム

益子の「文化」、「アート」、「自然」を体験できる会場として、城内坂通りと大羽地区を会場とした。

○陶芸・手仕事

つちかまうつわの土窯制作場所は、作家の学びの場として適切で一般来場者も参加しやすい場所であることを考え陶芸メッセ・益子を会場とした。益子焼陶板アートについては益子駅～城内坂通り周辺において観光客が通る動線上での現場調査を経て、益子駅ポケットパークを会場とした。

○その他

土祭期間序盤から参加できるイベントとして土祭スタンプラリー（世間遺産編）を実施した。土祭の総合受付（土祭ストア、アーカイブ展、土祭図書室を併設）は、人通りの多い城内坂に設営した。土音楽祭は土祭のシンボルである土舞台がある土祭広場で実施した。

《成果と考察》

今回の土祭では、感染症防止の観点から多くの企画が屋外会場となった。屋内会場となったセミナーについては、感染状況に応じて会場の定員数を減らしたり、セミナーの模様をオンラインで配信したりするなどの対応をとった企画もあった。

会場の分布については、地域ごとに偏りがあり、益子地区が31会場（1-2事業規模[会場・企画・人員]参照）と最も多く、埴地区、七井地区が2会場と最も少なかった。

その原因として今回会場の選定については、それぞれの担当部門ごとに決定していったことが考えられる。会場の偏りは、来場者からの不満感を招く可能性があるので、土祭全体としての会場選定の方向性を明確にしたうえで、部門間での綿密な調整が必要であった。

5-2 会期中の運営

会期中は下記の人員は配置によりシフトの調整を行った。

○アート作品展示会場 9か所 各1名

○土祭総合受付 1名もしくは2名

《実施の経緯と概要》

アート展示会場にはメイン期間中、展示スタッフが1名常駐した。今回から展示スタッフはボランティアではなく、町内業者への業務委託という形態だった。

2021年6月2日から11月14日まで城内坂の見目陶苑内に総合受付を設置し、電話やメールによるさまざまな問い合わせに対応した。期間中は、作品やイベント、交通に関する案内、公式コレクションファイルや公式グッズの販売などを行った。

《成果と考察》

運営上、大きな事故や破損などは特に発生しなかった。アート展示については、4名の事務局員が朝、現金入りのバックを各会場の展示スタッフに届け、展示時間終了後に回収するという方法をとっていたが、展示スタッフの始業時間、終業時間までにバックが届かない又は回収がされないということが数回発生した。これは、委託先のスタッフの都合で、事務局までバックを受け渡しに来られないという事情により起こったことであるが、その影響で事務局内での人員配置が常に余裕がない状態になってしまった。展示スタッフと事務局間のバックの受け渡しについては、改善の必要があると思われる。

土祭総合受付の開設によって、オフィスが分断し、事務局員内のミーティングや意思疎通の面で不便が生じたが、web会議などを活用し、週1回は定例会を設け、現状の確認と課題の解決を図った。

6.土祭開催におけるコロナウイルス感染拡大予防対策

[土祭期間中の新型コロナウイルス警戒度レベルステージの推移] ※栃木県新型コロナウイルス対策本部公表

- ・5月22日～7月29日 レベルステージ【2.5】 厳重警戒
- ・7月30日～8月7日 レベルステージ【3】 まん延防止等重点措置
- ・8月8日～9月30日 レベルステージ【4】 緊急事態措置
- ・10月1日～10月14日 レベルステージ【3】 まん延防止等重点措置
- ・10月15日～10月30日 レベルステージ【2】 感染注意
- ・10月31日～11月14日 レベルステージ【1】 感染観察

6-1 基本的な感染予防対策基準

土祭企画における「実施会場の屋内、屋外の別」「来場者の特定、不特定の別」に応じた、新型コロナウイルスに対する基本的な感染予防対策を規定した。

- A | 屋外で開催・来場者を特定しないもの（自由に来場できる屋外展示等）
- B | 屋外で開催・来場者を特定するもの（参加者の名簿管理を行う、屋外ワークショップ等）
- C | 屋内で開催・来場者を特定しないもの（自由に来場できる屋内展示・販売等）
- D | 屋内で開催・来場者を特定するもの（参加者の名簿管理を行う、屋内セミナー等）

[基本的な感染予防対策]

感 染 対 策 区 分	屋外		屋内	
	不特定 A	特定 B	不特定 C	特定 D
マスク着用の徹底	○	○	○	○
手指消毒の徹底	○	○	○	○
会場の定期消毒	○	○	○	○
距離の確保（2m 以上）	○	○	○	○
食べ歩きの禁止	○	○	○	○
17時以降飲食提供の禁止	○	○	○	○
顧客情報の管理（予約サイト、受付、名簿等）		○		○
入場者の検温		○	○	○
飛沫防止（アクリル板・パーテーション）			○	○
定期的な換気（30分に1回以上）			○	○
用 例	屋外展示	ワークショップ	展示 販売など	ワークショップ セミナーなど

6-2 土祭開催におけるコロナウイルスガイドライン

栃木県新型コロナウイルス対策本部が公表するコロナ警戒度レベルに応じて、土祭における開催基準・感染予防対策を規定した。

[コロナウイルスガイドラインにより中止・延期・内容変更の対策を行った企画数]

- 開催中止・一部中止 8 企画（主催者都合による中止は除く）
- 開催延期 15 企画
- 開催内容変更 5 企画

[コロナウイルス抗原検査実施回数]

コロナ警戒度レベルステージ3以上の地域から参加する土祭関係者を対象として12回実施

土祭開催におけるコロナウイルスガイドライン

令和3年5月22日公表
令和3年7月13日更新
令和3年7月30日更新
令和3年8月2日更新
令和3年8月6日更新
令和3年8月18日更新
令和3年9月10日更新
令和3年10月1日更新
令和3年10月15日更新
令和3年10月31日更新

●土祭開催における感染防止対策

[来場者・関係者共通]

- ・基本的な感染予防対策（検温・消毒・マスクの着用）の徹底。
- ・会場内のこまめな消毒と換気を行う。
- ・飲食提供はベンチなどを設け十分な場所確保し、歩きながら飲食しないよう徹底する。
飲食提供時間は17:00までとする。
- ・感染対策に伴う必要な掲示物の設置・アナウンスをおこなう。
- ・都道府県間の移動に際しては基本的な感染予防対策を徹底し、感染拡大地域への不要不急の移動は極力控える。

[関係者対策]

- ・関係者は個人情報の提出を必須とする。
- ・警戒度レベル3以上の地域から参加する関係者においては、ワクチン接種済証（写し可）の提示を求める。
- ・警戒度レベル3以上の地域から参加する関係者において、ワクチン接種から2週間が経過していない方等については、来町日の前1週間以内にPCR検査もしくは抗原検査を行い、陰性であることを確認する。町内関係者が、催事開催日前2週間以内に警戒度レベル3以上の地域への往來があった場合においても同様の対策を行う。

[個人を特定する企画開催について]

- ・警戒度レベル4地域からの参加を制限する。
- ・警戒度レベルに応じた来場者数制限を行い、身体的距離を確保する。
- ・屋内企画や入場管理などを行う場合、必要に応じて以下対策も講じる。
 - (1) 検温ができる出入口を設ける。
 - (2) 37.5℃以上の発熱がある、また感染が疑われる症状がある方の入場制限を行う。
 - (3) 顧客等の情報(氏名・連絡先・住所)を徴取・管理し、感染者発生時の追跡調査に対応するための措置を講じる。
 - (4) アクリルガードやガードフィルムの設置。
 - (5) 定期的な換気を行う。(30分に1度以上、数分程度を目安)

●土祭開催基準

警戒度レベル		催物開催における人数制限等	身体的 距離の 確保	企画ごとの開催基準					
				展示	販売	セミナー	体験	催事	飲食
4	緊急事態措置	上限人数 5000 人/収容率 50%以内の入場制限 開催は中止もしくは配信に切り替える。	1m	△	△	△	×	×	×
3	まん延防止等 重点措置	上限人数 5000 人/収容率 50%以内の入場制限 イベント開催時間 21 時まで	1m	○	○	△	△	△	×
2.5	厳重警戒	上限人数 5000 人/収容率 50%以内の入場制限 イベント開催時間 21 時まで	1m	○	○	○	○	△	△
2	感染注意	上限人数 5000 人/定員 100%以内（大声での歓声等 が想定される場合は 50%以内）の入場制限 イベント開催時間 21 時まで	1m	○	○	○	○	△	△
1	感染観察	上限人数 5000 人/定員 100%以内（大声での歓声等 が想定される場合は 50%以内）の入場制限 イベント開催時間の制限なし	1m	○	○	○	○	○	○

※1 警戒度レベルは、栃木県新型コロナウイルス対策本部の公表に基づき表示。

※2 土祭開催におけるコロナウイルスガイドラインは、栃木県の発令を基準に、益子町新型コロナウイルス対策本部が定め、土祭実行委員会が実行する。（県発令の警戒度レベルが変更された場合、その内容に基づき土祭開催基準を見直すこととする）

※3 土祭開催基準（企画ごとの開催基準）△表記については、入場制限（町民のみ等）及び配信への切り替えなど随時協議し対応。

※4 既存店舗の場合は店舗に関するガイドライン（国基準）に準ずる。

7.土祭 2021 の総括

土祭 2021 の開催は、長引く新型コロナウイルスの感染拡大による日常生活や地域経済の疲弊という状況のなかで、「感染拡大防止」と「文化経済活動」の両立を図り、ウィズコロナ、そしてアフターコロナの時代における新しい益子の魅力づくりにチャレンジしていく試みでもあった。

そして、開催にあたってはガイドラインに定められた感染対策を前提として、具体的には「会期の長期化による来場者の分散」や「屋外会場の活用」など感染拡大予防に十分に配慮した上で実施された。

7-1 感染予防対策

「会期の長期化による来場者の分散」について。

過去の土祭についてはおおよそ2週間という期間で開催されていたが、今期の会期は約6か月を設け、イベントを分散開催することで来場者の集中を避ける対策を講じた。会期を通して来場者に楽しんでもらうための企画として、写真展やウィンドウアート、土祭スタンプラリーなどの企画が行われたが、5月～9月においてはコロナ禍の警戒度レベルが上昇傾向となり、企画主催者においても積極的に企画を開催することが出来ない状況となった。そのため来場者へ案内できる企画が全体的に少なく、会期の長期化による開催の難しさを感じた。来場できない方に向けては、ウェブサイトやSNSを活用した映像配信を積極的に行い、行動制限の緩和後の誘客に繋げていく広報を行った。

「屋外会場の活用」について。

アート作品の展示会場のほか、ランドスケープツアーやサイクリングツアーなど、屋外の会場を活用することで、人との密を回避し、安全安心に来場いただける環境づくりを徹底した。屋外会場については、天候に左右されやすく維持管理もこまめに行う必要があることから、維持管理などの運用面での大変さもあったが、それ以上に、屋外会場を積極的に活用することで、日常であり足を運ぶことがなかったエリアの活用になり、地域資源を改めて捉えなおす機会となった。

7-2 文化経済活動

開催における組織体制は、11の部門（地域づくり | 住民プロジェクト | アート | 空間・会場 | 広報住民プロジェクト | セミナー | 食育・食文化 | ランドスケープ | ツーリズム | 陶芸・手仕事 | 関連企画 | 事務局）で構成された。地域づくり部門においては、益子町の3地区（田野地区・益子地区・七井地区）それぞれに地区委員会を設け、地区リーダーを中心に地域資源を活かした企画を行った。この地域づくりの体制は土祭2018から引き継がれている。

今回の土祭2021の組織体制については、11の部門がそれぞれの部門リーダーのもと、自主的な運営が行われ、地域資源を活かした学び・体験・展示などが開催された。土祭で磨き上げた地域資源を観光素材として継続的に提供できる実施体制づくりを整えていくことで、ウィズコロナ、アフターコロナにおいて未知の日常を提供する滞在型観光の事業化に向けての前進となる機会となった。住民参画の住民プロジェクトにおいても、19の自主企画が立ち上がり、益子ならではの個性あるプロジェクトが実施され、企画主催者の人材育成にも繋がった。このひとつひとつの活動においても、今後の滞在型観光地づくりの基盤となっていくことが期待できる。

7-3 企画運営参加者の満足度

【回収内訳】

- ・関係者ふりかえりアンケート依頼数 156 件/回答者数 75 件（回答率 48.1%）
- ・回答方法 用紙回答 39 件 52.0%・オンライン回答 36 件 48.0%

〔土祭 2021 関係者ふりかえりアンケート結果〕※一部抜粋

回答者が関わったプロジェクト アンケート項目		地域づくり	アート	陶芸手仕事	セミナー	食育食文化	ランドスケープ	広報住民	住民	空間会場	ツーリズム	関連企画	その他の企画	計	割合 %	割合 %
関わったプロジェクト ※複数回答		25	18	13	3	7	4	10	18	8	7	6	5	124	100	100
準備しているときの気持ち	とても楽しかった	3	9	9		1	2	2	2	3	3	1		35	28.2	71.0
	楽しかった	7	4	1	1	4		1	6		2	1	1	28	22.6	
	まあまあ楽しかった	7	2	1			1	3	5	3	1	1	1	25	20.2	
	少しつらかった	2	2	1	2	1		2	4		1	1	2	18	14.5	21.7
	つらかった	1							1	1		1	1	5	4.0	
	とてもつらかった	1						1		1		1		4	3.2	
	準備に参加していない	4	1	1		1	1	1						9	7.3	7.3
会期中の気持ち	とても楽しかった	4	8	11		2	2	2	6	3	3	1		42	33.9	84.7
	楽しかった	3	5		1	5	1	2	6	1	2	1	2	29	23.4	
	まあまあ楽しかった	8	5	2	2		1	4	4	2	2	2	2	34	27.4	
	少しつらかった	3							1					4	3.2	11.3
	つらかった	1						1		1				3	2.4	
	とてもつらかった	2						1		1		2	1	7	5.7	
	未回答	4							1					5	4.0	4.0
次の土祭に繋いだ方がよいと思う企画 ※複数回答		40	41	42	19	33	27	27	28	33	25	20	15	350		

＜成果と考察＞

関係者ふりかえりアンケートは、各プロジェクト・企画の運営メンバー（実施主体・関係者等）156 件に郵送にて調査依頼し 75 件（回答率 48.1%）の回答があった。アンケートの回答については、①用紙回答 ②オンライン回答で行ったが、用紙回答が全体の 52.0%・オンライン回答 48.0%であり、オンライン調査での回答手法が浸透している印象となった。

「とても楽しかった～まあまあ楽しかった」については、「準備しているとき」の 71.0%から「会期中」は 84.7%に上昇している。アンケートでは、会期中の嬉しかったこととして「作品が形になっていくこと」、「人との繋がりが形成されてきたこと」、「来場者の声が届いたことへの実感を持てたこと」などの記入があり、準備してきたものが、会期中に成果として目に見えるものになったことによって、「楽しかった」という意見が増えたものと考えられる。

「とてもつらかった～少しつらかった」については、組織体制の在り方や土祭に関わる時間の確保、コロナ禍による会期の変更や企画の中止などが挙げられており、継続可能な体制づくりを目指す上でも改善をしていく必要がある。

8.今後の展開について

8-1 土祭を通じた地域づくり、地域資産の保持・継承（内部的効果）

今までの土祭から継承されてきたように、土祭 2021 においても、町民・関係者の方との協働による地域づくり・地域資源の磨き上げによる展示や体験企画等の開催がされた。今期においては、コロナ禍での行動制限や感染予防対策などを第一と考え、町民の方に広く参画を求めることは困難となってしまったが、今後、可能であれば自治会や学校、小さなコミュニティそれぞれにおいても、地域づくりや、文化・風土を育む取り組みが広く行われていくことを期待する。

3年に一度の土祭を通して、あらためて「人との関わりしろを考え、協働で事を興す機会とする。」「地域遺産の磨き上げを行い発信していく機会とする。」この積み重ねにより、益子町の先人から受け継がれてきた歴史や文化、自然や風土を次世代に継承していくことに寄与できるのではないかと考える。

8-2 地域資源を活かした滞在型観光地域づくり（外部的効果）

土祭を通じて、地域づくりや地域資源の磨き上げを展開していく中で、益子町民のライフスタイルを提案・提供し、滞在型・日常型観光の充実を図り、益子の魅力として発信していくことで、来町するきっかけを創出していく。これにより、観光客等の外部的要因による経済効果に繋がっていくと同時に、ボランティアではない持続可能な観光地域づくりが形成されていくものと考えている。土祭には、その充実を図る大きな意味と使命をもっている。

土祭 2021 の組織体制においては、プロジェクトを 11 の部門に区分し、各部門リーダーによる自主的な運営が行われた。それぞれの得意分野において、地域資源を活かした魅力ある滞在型観光の事業化に向けて前進となったと考察する。

開催された企画数は、常設展示 11・イベント 44・関連企画 6、計 61 企画あり、前回と比較すると約 2 倍の企画数となっている。これは、会期の長期化による影響のほか、コロナ対策による少人数制の参加型企画を充実させたことと、滞在型観光地づくりのためのコト消費（体験企画）を意識的に実践したことが要因となっている。継続し取り組んでいくことで、中長期的視点での効果が出てくるものと期待できる。

土祭2021総括報告書

別添資料

全体における部門別事業費 事業費明細書

土祭実行委員会事業に係る事業費明細書

部 門	事業名	金 額	合計金額
総 務	【E-02】レポーター養成プロジェクト	424,730	7,938,726
	【L-1】土祭 2021 オープニング	37,228	
	【L-2】土祭 2021 クロージング	1,068,648	
	【L-3】土祭ストア	454,320	
	【L-4】土祭アーカイブ	352,742	
	【L-5】土祭スタンプラリー	257,753	
	【L-6】ヒジサイ図書室	10,000	
	【L-7】動画配信・3D view	66,000	
	総務 プロジェクトごとに分類できない支出	5,267,305	
アート	【C-01】感性の土壌「丘で踊る」	1,265,518	6,200,371
	【C-02】感性の土壌「森を歩く」	1,225,644	
	【C-03-1】感性の土壌「七つの神社を巡る」	2,155,339	
	【C-04】感性の土壌「大地で遊ぶ」	1,004,010	
	アート部門 プロジェクトごとに分類できない支出	549,860	
地域づくり	【A-01-2】たのひじ展	23,165	1,618,756
	【A-03-1】菜の花プロジェクト	211,024	
	【A-03-2】里山プロジェクト	181,269	
	【A-03-3】食プロジェクト	20,327	
	【A-03-4】竹細工プロジェクト	10,220	
	【A-02-2】昔の街並みと子どもの遊び～駄菓子屋開店～	96,921	
	【A-02-3】益子駅おもてなし企画	209,935	
	【B-6】おうちで見よう益子花火	483,485	
	地域づくり プロジェクトごとに分類できない支出	382,410	
空間・会場	【D-01】「土祭」の文字を書くワークショップ	43,375	1,416,794
	空間・会場部門 プロジェクトごとに分類できない支出	1,373,419	
関連企画	【K-02】アレッシアローロ写真展 Alessia Rollo 写真展 "The matter"	194,000	494,000
	【L-8】宇都宮大学共同研究「営みと暮らしの共有を通じたまちづくり/まちのデザイン」	300,000	
合計		17,668,647	17,668,647

経済対策事業に係る事業費明細書

部 門	事業名	金 額	合計金額
広報プロジェクト	広報プロジェクト（企画及び進行統括、ウィンドアート・プレスリリース編集・執筆ほか）	595,000	3,913,000
	ガイドブック（5回発行 各5,000部）	1,790,000	
	ウェブサイト（デザイン構築・更新ほか）	615,000	
	映像配信（アートプロジェクト、土音楽祭ほか）	913,000	
住民プロジェクト	出店者準備開発費補助 ※1	393,597	1,500,000
	出店者プロジェクト企画（企画・打合せ、事務費ほか）	745,040	
	チラシ制作・印刷・配布	160,000	
	会場設営準備（消耗品ほか）	65,000	
	事業全体に係る消費税分	136,363	
ツーリズム	ツアー掲載委託費	150,000	500,000
	サイクルツアー備品等（肘膝プロテクター、記録用機材ほか）	93,000	
	サイクルツアー催行費（ランチ代、ガイド謝礼ほか）	91,981	
	ツアーチラシ制作・印刷	25,000	
	その他管理費（SNS運用ほか）	94,565	
	事業全体に係る消費税	45,454	
食育・食文化	小麦プロジェクト ※2	481,171	1,000,000
	地ビールプロジェクト ※2	267,620	
	野菜プロジェクト ※2	251,209	
陶芸・手仕事	総務費（事業運営事務手数料ほか）	742,900	7,993,155
	つちかまうつわ ※3	1,270,290	
	益子焼アート ※4	5,674,965	
	オープンアトリエ（企画運営、アトリエ協力謝礼、アテンド協力謝礼）	95,000	
	土人形（ワークショップ講師謝礼 延べ5人×5,000円）	25,000	
	泥団子（ワークショップ講師謝礼 1団体×2回×10,000円）	20,000	
	広報（PR動画制作ほか）	165,000	
合 計		14,906,155	14,906,155

※1～※4 については別紙参照

※1

事業名	個別事業名	金 額	合計金額
住民プロジェクト	星宮神社に星をちりばめよう	25,000	393,597
	土から学ぶ環境問題～土しか勝たん～	5,850	
	益子焼の多様な可能性	25,000	
	益子参考館円座 昔ながらの民家	25,000	
	明水の十祭メニュー	-	
	マシコピト オリジナルランチ	25,000	
	ヒジノワ 秋の収穫祭	25,000	
	本通り 竹の燈プロジェクト	13,240	
	郷土料理を食べよう	25,000	
	ちとせの煮豚丼	25,000	
	里芋の揚げ出しとまぐろぶつ定食	25,000	
	農を知り、食を現す	25,000	
	伝統工芸竹細工と栃木レザーの融合	25,000	
	益子を描く	25,000	
	えのきだ窯 茶の間でつくる器	25,000	
	Nest 天然木材を使った作品の販売	25,000	
	ましこ産西洋野菜の普及と未来の農と食を考える	24,985	
	益子地区 花火	-	
	益子ヤギの集い	24,522	

※2

事業名	事業内容	金 額	合計金額
小麦プロジェクト	小麦生産《品種ゆめかおり 作付面積60a(田野地区30a・埴地区30a)、収穫600キロ》	312,060	481,171
	小麦製粉(423キロ)	71,561	
	パン試作	50,000	
	うどん試作	17,550	
	ピザ教室講師代	30,000	
地ビールプロジェクト	ビール麦生産(種まき 乾燥二条大麦 ニューサチホゴールド300キロ)	120,000	267,620
	製麦・テイスティング会	125,620	
	ラベルデザイン	22,000	
野菜プロジェクト	野菜(タマネギ・ジャガイモ・にんじん・ズッキーニ)・米生産(自然栽培米、合鴨農法)	162,056	251,209
	タマネギ(収穫911kg)		
	ジャガイモ(収穫95.6kg)		
	にんじん(収穫51kg)		
	ズッキーニ(収穫 なし)		
	米(玄米180kg、精米160kg)		
	収穫体験費用(さつまいも・にんじん)	3,780	
	〃(芽キャベツ)	20,000	
	給食レシピ制作(小学校1,230食、中学校665食 合計1,895食)	65,373	
合計			1,000,000

※3

事業名	事業内容	金 額	合計金額
つちかまうつわ	ワークショップ運営者謝礼（1名×2回×5,000円）	10,000	1,270,290
	窯焚きイベント作業賃金（参加者18名、3,000円×63回、リーダー手当5名×10,000円、準備作業手当4名×5,000円）	259,000	
	土窯制作作業賃金（参加者22名、1,300円延べ115時間、1,000円延べ482.5時間）	632,000	
	土窯材料費（縮土、耐火レンガ、たがね、単管パイプ、土のう袋、モルタルほか）	99,690	
	土練機修繕	39,600	
	造成業務(8㎡)	230,000	

※4

事業名	事業内容	金 額	合計金額
益子焼アート	陶板制作デザイン施工（陶板（150mm×250mm）製作費、陶板本焼枚数177枚、施工13.0㎡）	4,300,065	5,674,965
	躯体工事(既存嵩上げ 既存 W5300mm×H1900×D600～200→改修後 W5300mm×H2330×D600～200)	1,065,900	
	陶板焼成協力謝金（協力事業所7者 233枚×1,000円、焼成20枚以上の事業者燃料代5者×10,000円）	283,000	
	駐車場借用謝礼（2事業者）	20,000	
	おみくじ代（12個）	6,000	